



第12回(2018年)

全国高校生 歴史フォーラム



発表集

目 次

ごあいさつ	審査委員長・奈良大学学長 清水 哲郎	4
審査結果の講評		5
審査結果 優秀賞		6
審査結果 佳作		7
優秀賞受賞レポート（高校コード表順に掲載）		
岩手県立釜石高等学校		9
研究グループ名	SSH地歴公民（高橋ゼミ）	
研究者名	菊池知里・鈴木笙子・佐々木滉士・多田栞	
研究タイトル	南部藩の虎舞の起源を探る ～虎舞はどこで生まれ、どのように広まっていったのか～	
埼玉県・開智高等学校（中高一貫部）		23
研究者名	開本嘉仁・佐藤竜也	
研究タイトル	草加松原団地と現代地域資料保存の研究 「高校生草の根アーカイブズ」としての取り組みと課題	
長野県須坂高等学校		37
研究者名	宮崎愛斗	
研究タイトル	長野電鉄絵地図における幻の社名から探る 小林一三・神津藤平の先見的鉄道経営構想	
岐阜県立関高等学校		53
研究グループ名	地域研究部	
研究者名	片桐昂大・梅田拓海・岡本優奈・辻龍成・江崎晃定・土田真菜 神谷樹・臼田真之・西部寛太	
研究タイトル	渡辺 ^{さんぞう} 三三の撫順史研究 ～植民地支配と歴史学～	
大分県・大分東明高等学校		67
研究グループ名	郷土史研究部	
研究者名	安野花菜・古矢夕輝・亘鍋千晶・佐田昴駿	
研究タイトル	《1918》暴動・戦争・疫病 —100年前に大分でおきた3つの事件—	
第12回全国高校生歴史フォーラム 応募タイトル一覧		83

ごあいさつ

審査委員長・奈良大学学長 清水 哲郎

悠久の時を経て、その歴史を今も刻み続けている古都奈良。想像力をかきたてると、古代の壮大なロマンが脳裏をかすめ、歴史の豊かさと、文化の香りを感じることができます。

奈良大学のキャンパスは、奈良市北西部の丘陵地に位置し、豊かな自然と歴史遺産・伝統文化が息づく古都奈良全てが本学の学びのフィールドとなっています。隣接する関西文化学術研究都市では、新しい文化や新産業・最先端技術が次々と生み出されており、古代と最先端がクロスオーバーする地でもあります。奈良という恵まれた環境と京都、大阪に近いという本学の立地条件のもと、喧騒とした都会では決して味わえない、ゆっくりした時間の流れの中で学生達は豊かな大学生活を過ごしています。

1300年以上の歴史が息づくこの地に奈良大学が誕生したのは1969年のことで、来年4月には創立50周年を迎えます。本学には、現在文学部（国文学科・史学科・地理学科・文化財学科）と社会学部（心理学科・総合社会学科）、さらに大学院（文学研究科・社会学研究科）および通信教育部が置かれており、全国各地から多くの学生を迎えています。文学部では、古都奈良の歴史遺産と伝統文化という本物の研究素材を目の前に、古代から現代、奈良から日本、そしてアジア・世界へと、多様な教育・研究が展開されています。一方、社会学部では、社会学・心理学を中心に、人間とは何か、人間と人間の関係、個人と社会の相互的關係、さらには、グローバル化した現代社会のさまざまな現象や課題をテーマに、教育・研究が行われています。

既にご存知の方もおられるかと思いますが、今年のトピックスとして朝日新聞出版『2019大学ランキング』の大学図書館ランキングで本学図書館が全国第1位になったことが上げられます。図書館には55万冊以上の蔵書があり、15万冊を超える文化財専門書がそろっており、本学図書館は日本屈指の歴史・文化財情報に関する知の拠点として国内外から注目されています。皆様方も、ぜひ一度本学図書館をご利用いただければと思います。

さて、第12回目を迎える今年度の本フォーラムでは募集テーマをテーマA「歴史や地理、史跡、文化財、文学、人物などに関する研究」、テーマB「自然・歴史資産を活用した奈良県の魅力的な観光文化の形成、地域活性化について考案したレポート」の2つ設定しましたが、残念ながらテーマBの応募はありませんでした。テーマAにつきましては、今年度は応募校数が45校、応募点数が73編を数え、それぞれ力作を寄せてくださいました。全国から選び抜かれた優秀校に5校が、また佳作として5校が選ばれました。奈良賞につきましては、残念ながら該当はありませんでした。

全国歴史フォーラムの開催にあたり、ご尽力を賜りました皆様に心から感謝申し上げるとともにご指導にあたられた先生方と熱心に研究して応募された高校生の皆様に、お礼の言葉を申し上げます。選考の経緯と結果につきましては、講評をご参照ください。

審査結果の講評

全国高校生歴史フォーラムを開催してから、今年で第12回となります。毎年全国各地から多数の応募をいただいております、今年も45校の高校から73編の応募をいただきました。昨年よりも少し応募件数が少なくなりましたが、どの研究成果も取り組み方が伝わり、研究に対する熱意と水準は全体としてこれまでと同様のように感じました。

近年、研究の着眼点、研究の進め方については多様性を帯びているように思えます。たとえば、戦争に関わる研究成果は例年多くみられますが、住んでいる地域や学校に残された資料を掘り起して分析するだけにとどまらず、個性のある切り口で当時の社会情勢と連動させながら展開していくような研究へ、そして身近な地域の枠にとらわれず広い視野をもった研究へと変化しつつあります。また、現代の生活で蓄積されている資料を整理保存していくことが後世の史料となるであろうと考えた研究は、過去・現代・未来をつなぐユニークさが魅力的といえるでしょう。

しかし、個性的な切り口やユニークであることだけで優位に立つことはありません。やはり基礎的な知識と研究の進め方は必要不可欠です。資料（史料）を入手したうえで丹念に整理と吟味を繰り返し、分析していくことから進めなければなりませんし、また、研究成果を読んだ読み手がわかるようにすることも報告としては重要なことです。そのためには図表、写真にも力を入れなければなりませんし、限られた枚数ですから本当に必要なものだけに絞らないといけません。論証していく過程を文章のみならず、提示した資料を使って相手に納得させねばならないのです。

審査をするにあたって、多く寄せられた研究成果のなかから、研究水準はもちろんのこと、高校生らしいテーマの独創性とレポートの体裁についても議論が交わされました。グループと個人での取り組みの違いにも気を付けながら慎重に審査を進めました。最終段階に至った研究成果は拮抗状態にあり、審査委員が悩んでしまう場面もありました。最終選考に至らなかった研究のなかには、インターネットの有用性を考慮せずそのまま引用した成果、文献を多く読み自分の解釈を加えるにとどまった成果、独走的な着眼点であるが問題を解決するために研究手法が合っていなかったり、不十分なまま結論を出している成果などがありました。

今回の応募については、テーマA（歴史や地理、史跡、文化財、文学、人文などによる研究）とテーマB（自然・歴史資産を活用した奈良県の魅力的な観光文化の形成、地域活性化について考案したレポート）と2つのテーマを設定しましたが、従来型の研究色が強いテーマAの応募のみであったことを添えておきます。

第12回全国高校生歴史フォーラム審査委員会
(文責 土平 博)

審査結果

優 秀 賞

(高校コード表順に掲載)



岩手県立釜石高等学校

研究グループ名：SSH地歴公民（高橋ゼミ）

研究者名：菊池知里・鈴木笙子・佐々木滉士・多田菜

研究タイトル：南部藩の虎舞の起源を探る

～虎舞はどこで生まれ、どのように広まっていったのか～



埼玉県・開智高等学校（中高一貫部）

研究者名：開本嘉仁・佐藤竜也

研究タイトル：草加松原団地と現代地域資料保存の研究

「高校生草の根アーカイブズ」としての取り組みと課題



長野県須坂高等学校

研究者名：宮崎愛斗

研究タイトル：長野電鉄絵地図における幻の社名から探る

小林一三・神津藤平の先見的鉄道経営構想



岐阜県立関高等学校

研究グループ名：地域研究部

研究者名：片桐昂大・梅田拓海・岡本優奈・辻龍成・江崎晃定・土田真菜
・神谷樹・白田真之・西部寛太

研究タイトル：渡辺^{さんぞう}三三の撫順史研究

～植民地支配と歴史学～



大分県・大分東明高等学校

研究グループ名：郷土史研究部

研究者名：安野花菜・古矢夕輝・亘鍋千晶・佐田昂駿

研究タイトル：《1918》暴動・戦争・疫病

—100年前に大分でおきた3つの事件—

審査結果

佳 作

(高校コード表順に掲載)



群馬県立桐生高等学校

研究グループ名：地歴部

研究者名：坂輪知哉・見城幸太・松井僚汰・蓮見剛生

研究タイトル：形式と戒名から探る地域信仰の形態
—安中市 自性寺の墓石を中心に—



埼玉県・開智高等学校（中高一貫部）

研究グループ名：歴史研究同好会

研究者名：川村裕大・米澤翼・栗原了頌

研究タイトル：「忠魂碑」への“眼差し”～過去・現在・未来～
埼玉県岩槻区「忠魂碑」群の史資料の“可能性”—保存と課題—



神奈川県立秦野曾屋高等学校

研究グループ名：日本史研究部

研究者名：山田史也

研究タイトル：奥津家文書から見る御旗奉行の役割



京都府立宮津高等学校

研究グループ名：フィールド探究部

研究者名：岡野壮一郎

研究タイトル：与謝郡与謝野町加悦谷の歴史社会
—石造物の基数と銘文に着目して—



長崎県立壱岐高等学校

研究グループ名：東アジア歴史・中国語コース歴史学専攻

研究者名：中村史明・松坂ビンセント・安永雅登・與賀田尚吾・市山沙代子

研究タイトル：長崎県壱岐市大久保遺跡の研究
～縄文時代晩期貝殻粉混和土器に関する一考察～



南部藩の虎舞の起源を探る

～ 虎舞はどこで生まれ、どのように広まっていったのか ～

岩手県立釜石高等学校
SSH地歴公民（高橋ゼミ）

菊池知里・鈴木笙子・佐々木滉士・多田栞



1 はじめに

本校のある釜石市の代表的な郷土芸能として虎舞がある。虎舞は北は青森県から南は鹿児島県まで幅広く分布している〈注1〉。その多くが太平洋沿岸地域に分布しているのが大きな特徴であるが、中でも岩手県の三陸沿岸には数多くの虎舞が伝えられている。

釜石市には14の団体があり、北の大槌町の4団体、南の大船渡市の6団体と比較しても突出している。

日本には虎が存在しないのに、なぜ虎舞があるのか。

形態が獅子舞のように虎頭を頭に被り、虎の柄を描いた幕の中に2人、3人が入り囃子に合わせて舞うことから、獅子舞が虎の外容に変化した。このように虎舞の起源を獅子舞とみなす説が言われている〈注2〉。

そうであるならば、いつの頃から、どこで獅子から虎に変化し、どのように広まっていったのか、調べることにした。

2 三陸地方の虎舞

三陸地方は釜石市の南部を境として北は南部藩、南は伊達藩に分かれる。虎舞の形態をみると大きな違いがある。

(1) 伊達藩の虎舞

釜石市の南にある大船渡市の門中組虎舞は頭が獅子である【写真1】。明らかに獅子舞やこの地域に古くから伝わっている権現舞が変化したものと言える。であるから祭礼で奉納される以外に、春祈祷や火伏せなど、本来は悪魔払いとして山伏神楽が果たしていた役割に虎舞が用いられる例が多い〈注3〉。

また、宮城県唐桑町の松圃虎舞のようにはしごを使ったり、虎役2人が肩車をしたり、後役が前役を逆さに吊すなど曲芸的な踊りも特徴としてあげられる【写真2】。

(2) 南部藩の虎舞

虎頭は本物の虎を似せてつくってあり、伊達藩のように曲芸はせず、笹竹と戯れるなど、激しい踊りが基本となっている。その由来の多くは口伝伝承であるが、大きく次の2つに分かれる。

ア 釜石市の尾崎虎舞の由来は、今からおよそ830年前、源為朝（鎮西八郎為朝）の3男である閉伊頼基が、鎌倉幕府から気仙郡・閉伊郡を治めるように言い付き、伊豆からやってきた。この時の7人の部下のうちの1人が、将士の士気を鼓舞するために、虎の着ぐるみを着せて踊らせたとある〈注4〉。

閉伊頼基は承久2年(1120)に死んだが、その時、頼基は日本武尊（ヤマトタケルノミコト）を崇拝していることから、日本武尊の剣の下に埋葬してほしいという遺言により尾崎神社に日本武尊と共に祀られている【写真3】。

釜石市内で1番古いとされる虎舞であり、近隣の虎舞に大きな影響を与えたと考えられる。以下「尾崎系」と表現する。

イ 釜石市の北にある大槌町に伝わる虎舞の由来は、今からおよそ250年前の江戸時代中期、三陸随一の豪商として名高い前川善兵衛助友（吉里吉里善兵衛）が江戸で大ヒットしている近松門左衛門の浄瑠璃「国性爺合戦」の一節から、千里ヶ竹で和藤内が大虎退治をした場面に感動し、当時、山田町（大槌町の北部）の大沢出身の船方衆が

これを故郷に持ち帰って創作舞踊とし奉納した。

従って、虎舞を演じる人の他に、和藤内役が登場し虎を退治する演目がある【写真4】。以下、「前川系」と表現する。

3 南部藩の虎舞の演目

「尾崎系」も「前川系」も南部藩の虎舞は格好だけではなく動きも虎そのものである。和藤内の虎退治以外の演目は基本的に次のような順序で構成されている。

「遊び虎」… ゆっくりしたテンポで、春の日差しを浴びながら無心に遊ぶ虎を表現している。

「跳ね虎」… 一転してアップテンポで手負いの虎が暴れ狂う様子を表現している。

「笹喰み」… クライマックスでの踊りで、獲物を求めて気性の荒くなった虎が笹に噛みついて牙を磨く様子を表現している【写真5】。

このように南部藩の虎舞は想像の世界ではなく、虎の動きや生態を詳しく表現した踊りとなっている。

そこから、南部藩では実際に生きている虎を見たことがあるのではないか、という仮説に立って調べてみた。

4 南部藩の虎

慶長19年(1614)に南部藩第27代藩主南部利直は、大坂冬の陣に参陣し、冬の陣が終わると続けて豊臣方の重臣である片桐且元の居城である茨木城を接收した。その報告をするために徳川家康のいる駿府城へ行ったところ、丁度カンボジア使節団が2頭の虎を家康に献上していた。利直は、その虎を家康から拝領すると盛岡に持ち帰り、盛岡城の一画で飼育した。このことを示す史料が次のとおりに残っている〈注5〉。

慶長九年十二月大坂和睦、両御所御凱陣あり、諸陣場引払諸大名江戸駿府へ参上也。依之利直公も茨木御陣場御引払、駿府にて御目見、相済候砌、去年八月カボチャと云国より虎の子二疋献上候処、右虎を利直公拝領被仰付、則国へ引下し、下の橋の向(米内曲輪と元御蔵之間に有之、信視公御代、此本蔵を内丸石間に引て後石間御蔵と号す)鍛冶屋御門の下に右虎囿牢を拵へ入置玉ふ処に、壺疋の虎囿を破りて逃出づ。川原小路を馳行所を十匁鉄炮二ツ玉にて御自打給ふと云。一疋は寛永二年病死す。

『篤焉家訓』巻二十五

そもそも虎は高松塚古墳に描かれているように、四神の一つである白虎として中国から伝わったとされる。『日本書紀』の「欽明天皇」には虎退治の話がある。新羅に使いに行った膳臣巴提便の子が虎に襲われ殺された。怒った膳臣巴提便は、虎を太刀で殺したうえに皮を剥いで持ち帰った。それ以降、虎の皮や骨は渡来し、京都の葵祭でも従者が虎の皮を携えて歩いている【写真6】。

また、戦国・江戸時代の大名たちのステータスのシンボルとして虎皮が重用されていた〈注6〉。

しかし、実物の虎が日本に来るのは、徳川家康に献上された虎が初めてと推論する。江戸時代に見世物小屋で虎が登場するのは幕末期である〈注7〉。そんな中で、江戸時代の初期に見世物小屋ではなく、実際に生きている虎を飼育していたことは大いに話題になっ

たに違いない〈注8〉。

5 慶長の大地震

生きている虎を見た人物が三陸沿岸に南部藩の虎舞を広めたと仮定したならば、その人物は誰なのだろうか。

虎を飼育していた盛岡から三陸沿岸までは100km離れており、一般的な庶民が容易に行ける距離ではない。盛岡に虎がやってきたとされる1614～15年以降に三陸を訪れた人物として、虎を持ち帰った本人である南部利直があげられる。

奇しくも東日本大震災から丁度400年前の慶長16年(1611)旧暦10月28日に発生したマグニチュード8.1の地震〈注9〉による大津波によって三陸沿岸は壊滅した〈注10〉。

それから4年後の元和元年(1615)、利直は震災後の状況を見るために三陸沿岸を視察している。特に釜石市の北部にある宮古には20日間あまり逗留し、町割(現在の都市計画)を行い、藩港として宮古港を整備した〈注11〉。

なぜ、交易や軍事の中心である江戸により近い釜石を藩港にしなかったのか。

それは先に述べたように、釜石湾につながっている南部の唐丹地区から伊達藩であることから、境界に近いと、伊達藩からの圧力もあり釜石を藩港とはできなかったと考えられる〈注12〉。

6 伊豆

「尾崎系」の由来である閉伊頼基の父である源為朝は、保元の乱に敗れ伊豆大島に流されるが、そこで復活をしたため追討を受け自害した。そこから為朝伝説が始まり、八丈島に逃れ琉球に現れることとなる〈注13〉。そして三男である閉伊頼基が伊豆から閉伊郡へやってくる。

一方、「前川系」の由来である前川善兵衛の前川家は大槌(吉里吉里)に来る前は、戦国時代は相模の前川郷を支配し、その後、伊豆下田で津方(港・舟関係の仕事)をしていたが、そこを支配していた北条氏が滅ぼされたため、奥州気仙浦へ逃れ、最終的に吉里吉里に定住した〈注14〉。

つまり、「尾崎系」も「前川系」も由来を探ると共通点は伊豆にあることから、伊豆に虎舞の起源を探るヒントがあると考えた。

7 「虎舞文書」

静岡県下田伊勢町の区有文書に「虎舞文書」がある。この文書によれば下田伊勢町の虎舞は慶安年間(1648～52)からさらに数十年以上さかのぼることができるという。そして寛永期(1624～44)には竜虎の舞いが始まるとされる〈注15〉。

現在、下田伊勢町の虎舞は全く消えてしまったが、分家として伝わったとされる南伊豆町の小稲の虎舞は、下田伊勢町の虎舞を今に伝えている【写真7】。

また、奉行所が下田から神奈川県横須賀市の浦賀に移ったのをきっかけに、浦賀にも下田伊勢町の虎舞が伝わったが、この虎舞は源為朝が祭られている為朝神社に奉納している【写真8】。この点は「尾崎系」との関係が考えられる。

また「尾崎系」虎舞の由来では着ぐるみを着て舞ったとされている。現在、南部藩の虎

舞は着ぐるみではないが、獅子舞とは違って頭から尾にかけて腹帯を渡している。その一方で小稲と浦賀の虎舞は両方とも着ぐるみとなっている。この点も「尾崎系」との関係を示している〈注16〉。

しかし、両方とも演目に注目をする「前川系」であり、このことから、小稲と浦賀の虎舞は「尾崎系」と「前川系」を融合した形になっているといえる。

8 南部利直

南部利直は三陸を巡回し、宮古に滞在中にそばに使えた娘との間に後の29代藩主重信をもうけた。このように宮古滞在の記録は詳細に残っているが、釜石に滞在した記録は残っていない。

しかし、利直が三陸沿岸を巡回した際に、尾崎神社を直参したはずである【写真9】。

尾崎神社は釜石湾から海に突き出た岬の突端にあり、交通の難所であることから、昔から釜石の守護神として漁師や船乗りの海上安全の神様を祭っている。しかも伊達藩との境界という軍事的にも要所となっている。

津波を被った田畑は、流れ込んだ汚泥を掻き取ったのちに塩抜きをしないと使用できない。この作業は困難を極めたはずである。また、堤防の構築や防潮林の植樹など課題は山積だったはずだ。

4年たっても復興が遅滞として進んでいない田畑や湊を目の前にして、利直は尾崎神社で日本武尊と閉伊頼基に復興を祈願したに違いない。

9 虎と海

虎舞は何を祈願して奉納しているかを調べてみると、多くの虎舞が航海の安全と操業の無事安全、大漁を祈願している〈注17〉。

その根拠として、中国の古典の『易経』に「雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ」とあること〈注18〉。また、「虎は千里行って千里帰る」という古くから言われてきた諺などから、虎のもつ神秘の力への信仰があげられている〈注19〉。

しかし、その『易経』を単純に読めば、虎が風を生むとは陸を支配する（それに対し龍が空を支配する）ことを意味していると解するのが自然である。龍虎の絵は古来から多く描かれているが、「白虎と青龍」をもとにした絵であって、その場面に海は描かれていない。

いったい誰が虎と海を結び付けたのだろうか。

それは南部利直ではないだろうか。

三陸沿岸を巡回した際に、前年に生きた虎を持ち帰ったばかりの利直は、復興を祈願すると共に、虎の「文化」を三陸の海に持ち込んだのだ。

利直は宮古を藩港とすると藩船二隻を造り、宮古丸、虎丸【写真10】と名づけた。自分が乗る御座船の名前が虎でなければならない理由は、虎と海を結び付けた利直自身にあると考える。

それ以降、前川家に代わって台頭する宮古市の豪商盛合家も船の名を「虎丸」と名づけるなど、三陸と虎が結び付いた例が見られるが、利直の巡回以前には見られないことから利直自身が関係していると考えるのが妥当である。

10 尾崎神社遙拝所

元禄12年(1699)に尾崎神社の遙拝所が建立された際に、太神楽と虎舞が奉納された(注20)。この時演じられた太神楽は、現在でも南部藩壽松院年行司支配太神楽【写真11】として伝わっている。この神楽は南部藩の芸能集団である七軒丁から伊勢太神楽を習ったものを今に伝えるものとして貴重であるが、頭は獅子である(注21)。

つまり、獅子舞や権現舞から変化した虎舞ではなく、少なくとも1699年の時点では獅子と虎が明確に分かれて、それぞれが演じられたと言うことを示している。

このことから、1615年の南部利直の巡回をきっかけに、三陸沿岸の復興の願いを込めて「尾崎系」虎舞が生まれ、1699年にデビューしたと考えられる。

11 国性爺合戦

正徳5年(1715)、大坂の竹本座で人形浄瑠璃で「国性爺合戦」が初演されロングランとなり、翌年には歌舞伎に移され京都で演じられる。江戸三座(中村座、市村座、森田座)で上演されるのは正徳7年(1717)である。

つまり、「前川系」の虎舞で演じられる虎退治の場面を前川善兵衛が持ち帰ったのは、早くても1717年以降である。このことから、1699年にはすでにあった「尾崎系」虎舞の影響を受けて「前川系」が誕生したのではないだろうか。

12 三陸と伊豆

南部藩の御用商人である前川家には「前川善兵衛家文書」という膨大な史料が残っている。それによると海産物や米・大豆などを江戸に積み出して富を蓄積し、江戸までの航路の中継地として浦賀が重視され、ここによく立ち寄っていたとある(注22)。また、先述のとおり、前川家は下田とも縁が深いことから、「前川系」が伊豆に伝わることは容易であったと考えられる。さらに、煎海鼠(イリコ)や干鮑などの長崎俵物の出荷にも従事したとある。交易に伴って「前川系」の虎舞が太平洋沿岸に伝わっていき現在に至る理由の一つとしてあげることができる。

13 おわりに

以上のように、南部藩の虎舞は獅子舞や権現舞から単純に変容したものではない。最初に「尾崎系」が登場し、そこに「前川系」が加わりながら、太平洋沿岸へと伝播したのではないかと考える。

逆に、伊豆から三陸沿岸に「尾崎系」や「前川系」が伝わった可能性もある。「虎舞文書」はその可能性を示唆している。今後の検証が必要であろう。

しかし、三陸沿岸と伊豆が互いに交流し影響を与え合いながら、現在の虎舞の形ができたのは確かである。

東日本大震災の際、被災者に元気を与えたのは虎舞であった。津波で虎舞の道具が流されても多くの支援を受けて復活を遂げた団体もある。復興のシンボルとして虎舞があった。

丁度400年前の三陸に起こった地震に対しても、同じようなことが、もしかしたら起こっていたのではないだろうか。

これが私たちが到達した答えである。

【参考・引用文献等】

- 注1 佐藤敏彦編著『全国虎舞考』平成4年 釜石市地域活性化プロジェクト推進本部
- 注2 森口多里『岩手県民俗芸能誌』昭和46年 錦正社
- 注3 大石泰夫「陸中沿岸の虎舞考」『祭りの年輪』平成28年 ひつじ書房
- 注4 尾崎神社宮司 佐々木裕基氏より聞き取り
- 注5 本文にあげた史料の他にも、次のような史料等が数多く残っている。
寛永三年是年条
是年南部信濃守利直は、慶長十九年駿城にて給はりし虎二疋有りしが、其一は去年死しければ、其皮をはぎて、利直父子鞍帛につくり、許を得て御上洛供奉の時より用ゆ
『徳川実紀』大猷院殿御實紀巻八
- 注6 「加藤清正 虎皮を贈られ礼状 豪商の伝来文書から発見」毎日新聞 平成30年9月1日付朝刊
江戸時代の史料として、次のものがあげられる。
虎皮鞍覆
御三家 越前 津山 薩州 奥州 肥後 筑前 芸州 佐賀 長州 備前 因州 阿州 土州
久保田 久留米 米沢 会津 雲州 対州 盛岡 柳川 津 喜連川 高松 西条 川越 明石
宇和島 弘前 富山 忍 松平大学頭 松平播磨守 鍋島学 四良 陪臣伊達家片倉小十郎
『武家提要』
- 注7 瓦版に「万延元年（1860）庚申の初夏に、オランダ本国の通商官が、日本の新港横浜の地へ、一疋の虎を持って渡って来た。」とある。
- 注8 前掲5の史料などをもとにして「不来方城の虎」という民話となっている。
深澤紅子、佐々木望編『岩手の民話』昭和32年 未来社
- 注9 宇佐見龍夫『日本被害地震総覧』昭和50年
ちなみに東日本大震災はマグニチュード9.0
- 注10 死者仙台藩1,793、南部・津軽3,000余 蝦名裕一（東北大学東北アジア研究センター）
- 注11 宮古市ホームページ 「宮古湾歴史展」より
(http://www.city.miyako.iwate.jp/data/open/cnt/3/5760/1/history_exhibition_of_port_of_miyako.pdf)
- 注12 当時、この地域を支配していた大槌城主孫八郎（政貞）と南部利直が対立していたため港をつくらることができなかったという説もある。ちなみに孫八郎は元和元年（1617）自刃した。
- 注13 村上元三・和歌森太郎「源為朝」『日本史探訪』第5集 昭和53年 角川書店
- 注14 大石泰夫「吉里吉里虎舞」『大槌町の民俗芸能』平成28年 大槌町民俗芸能調査委員会
- 注15 佐藤彰「虎舞」系譜考『民俗芸能研究』第2号 昭和60年 民俗芸能会
- 注16 前掲3に同じ
- 注17 神田より子「日本の虎舞と虎文化」『自然と文化』50 平成7年 日本ナショナルトラスト
- 注18 前掲1に同じ
なお、この一節は「世に聖人の君主が出れば、必ず賢人が家臣となる」というたとえで用いられている。
- 注19 橋本裕之「大船渡市における民俗芸能の諸相と特徴」『大船渡市民俗芸能調査報告書』（祈りを舞う、暮らしを踊る）平成28年 大船渡市郷土芸能活性化事業実行委員会・大船渡市民俗芸能調査委員会
- 注20 『尾崎神社略記』
前掲4に同じ
- 注21 釜石市ホームページ「かまいしの民俗芸能」より
(<http://www.city.kamaishi.iwate.jp/mobile/kyoudo/kamaishi/geinou.html>)
- 注22 前掲3に同じ

【写真1】門中組虎舞



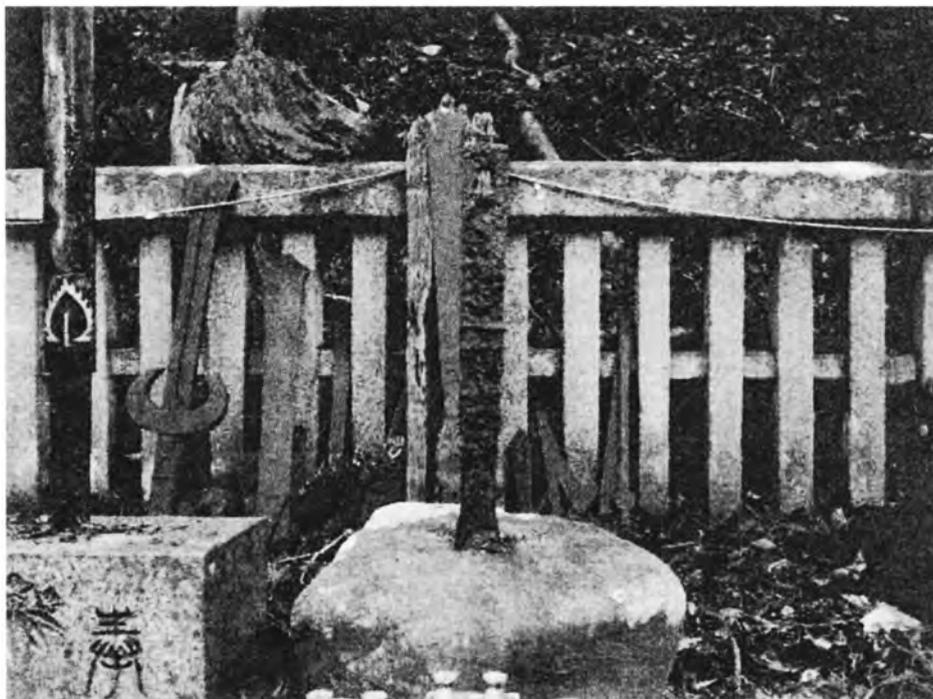
2017三陸国際芸術祭ホームページより転載
(<http://www.sanfes.com/artist/kadonaka.html>)

【写真2】松園虎舞



宮城県ホームページ「宮城県文化財」より転載
(<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/bunkazai/shitei170221.html>)

【写真3】尾崎神社 奥の院の宝剣（日本武尊が安置したといわれる）



【写真4】吉里吉里虎舞（大槌町）和藤内が虎をおさめる場面



公益財団法人 岩手県文化振興事業団ホームページより転載
(<http://www.iwate-bunshin.jp/report/post-85.html>)

【写真5】 錦町虎舞（釜石市）笹喰みの場面



「ウチノメ屋敷 レンズ目」ホームページより転載
(http://www.uchinome.jp/document/document6_01_3_1.html)

【写真6】 葵祭（京都）



「いとをかし京日記」ホームページより転載
(<https://www.leafkyoto.net/blog/kyonikki/2010/05/page/2>)

【写真7】小稲の虎舞（南伊豆町）和藤内との対決の場面



小稲の虎舞 豊作の年に演じられる龍虎の舞い



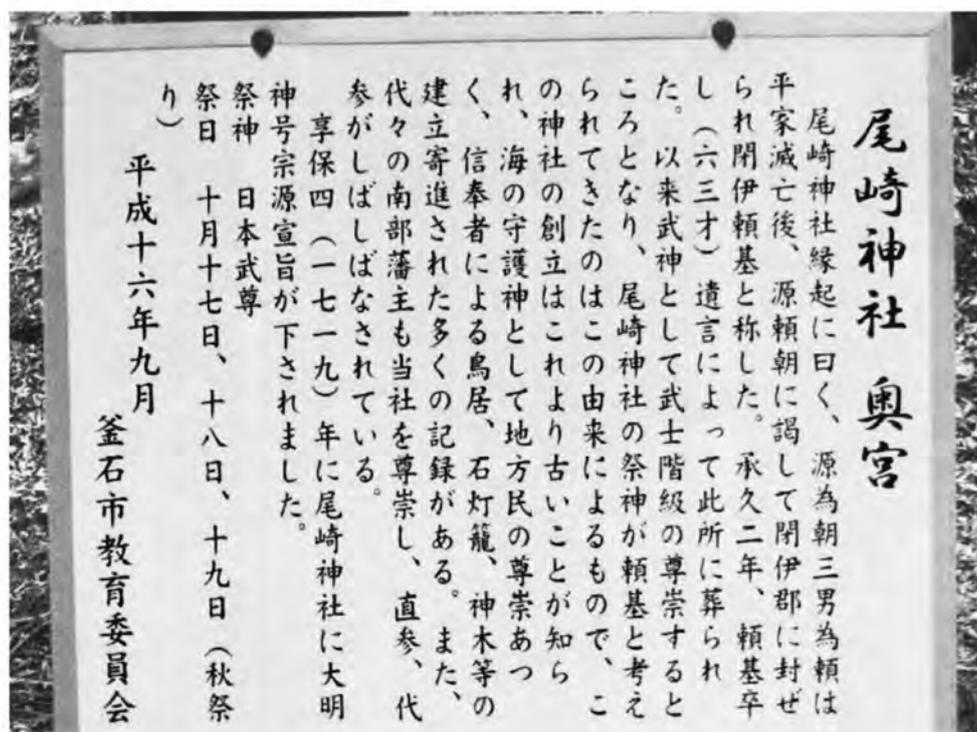
静岡新聞SBSホームページより転載
(<http://www.at-s.com/event/article/festival/116710.html>)

【写真8】浦賀の虎舞（神奈川県横須賀市）正面奥にいるのが和藤内

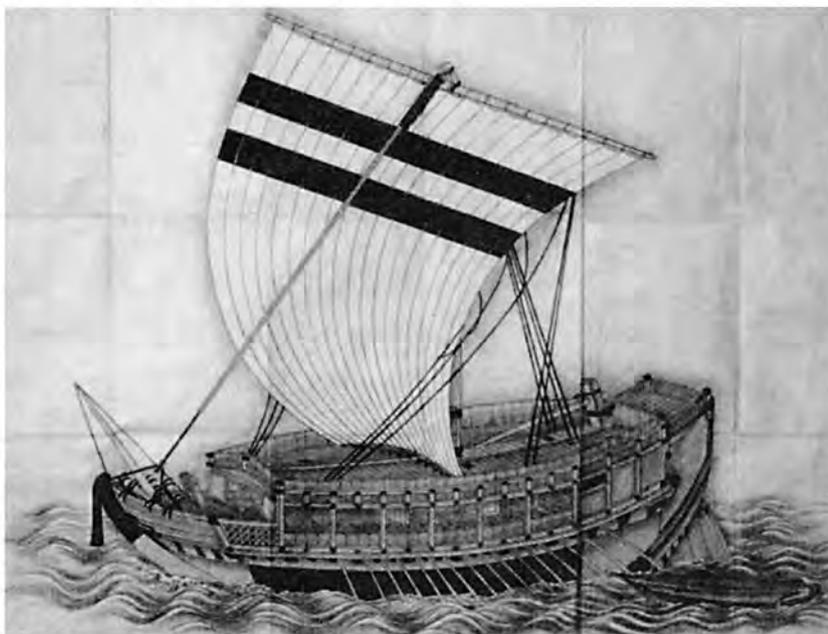


横須賀観光情報ホームページ「ここはヨコスカ」より転載
(<https://www.cocoyoko.net/event/tiger-dance.html>)

【写真9】尾崎神社 奥宮の掲示板



【写真10】 藩船「虎丸」（盛岡市中央公民館蔵）



一般財団法人 みなと総合研究財団 港別みなと文化アーカイブズ
假屋 雄一郎 宮古港の「みなと文化」より転載
(<http://www.wave.or.jp/minatobunka/archives/report/007.pdf>)

【写真11】 南部藩壽松院年行司支配太神楽



釜石市ホームページ「かまいしの民俗芸能」より転載
(<http://www.city.kamaishi.iwate.jp/mobile/kyoudo/kamaishi/geinou.html>)



草加松原団地と現代地域資料保存の研究

「高校生草の根アーカイブズ」としての取り組みと課題

開智高等学校 中高一貫部

かいもと よしひと
開本 嘉仁(高校2年)

佐藤 竜也(高校2年)



第一章 はじめに

2017年4月1日、東武スカイツリーライン「松原団地駅」の名称が変更となった。新駅名称は「獨協大学前<草加松原>」である。元の駅名の由来となっていた「草加松原団地」の名前は消えてしまった。現在は建て替えられ名前も「草加松原団地」から「コンフォール松原」と変わったが、駅西口は今でも住宅マンションが変わらず立ち並び、建設当初に東洋最大の団地とも謳われた面影は健在である。

草加松原団地(以後松原団地とする)は埼玉県草加市にある【地図1】の都市再生機構が経営する賃貸マンションである¹。原武史氏の近年の研究からも見て取れるが、「団地」は昭和の高度経済成長期の社会史・昭和文化史・建築史を追跡するうえで重要な史資料である²。我々は当初、建て替え前の松原団地と現在の団地ではどのような変化があったのか調べていたが、草加市に資料がないか問い合わせたところ、建設当初の資料などは見当たらないとの回答を得た。管理会社の都市再生機構にも問い合わせたが、こちらもほとんどないとの回答であった³。60年ほど前の情報が手に入らないことに疑問を思った。我々は松原団地に関する現状として以下の仮説・考察を立て現状を考察することにした。

【仮説】コンフォール松原に建て替わったことで、多くの機関にとって以前の松原団地についての関心はなくなったのではないか。

【仮説】松原団地の資料保存は現状どの機関も積極的に行っていないのではないか。

【考察】松原団地は希少な巨大住宅団地であり、松原団地は後世に残す価値のあるものだ。

【考察】仮説が事実ならばそれは問題であり、市民の手で保存活動をする必要がある。

本編では先述の通り、1962年(昭和37年)に日本住宅公団(都市再生機構の前身)によって建設された松原団地を取り上げる⁴。草加市と都市再生機構と当該自治会の三者がどのようにして巨大な住宅団地を管理し、どのような経緯で60年近く使われこれからどのように保存されていくのか、松原団地の歴史をたどりながら三者間の問題点を指摘する。またこの調査は近代の史資料の保存をどうしていくかということを考え、行動することを企図する側面がある。複数の調査を踏まえ松原団地に関する「資料集」を編纂する活動を通じ仮説と三者の見解の異同などについても多角的に考察する。

第二章 調査の対象と手法

調査においては以下の手法や観点に主眼を置いて当該機関に対して実施し、その結果をもとに考察を行った。本章では調査の手法について詳説し、第三章においてそれぞれの調査結果について述べたい。

- ① 松原団地の建設時から現在に至るまでの歴史、資料の保存状況について。
- ② 松原団地の実地調査、現状分析。 ③ 当該自治体(草加市)への聞き取り
- ④ 管理会社である都市再生機構への聞き取り ⑤ 当該自治会への聞き取り
- ⑥ 草加市立図書館、草加市郷土資料館の聞き取り調査、資料文献調査

①では、現在までにどのような経緯で建設、発展、建て替えまで至ったのかについて調査を行った。②では2018年(平成30年)7月29日、8月10日、18日、26日、9月9日の計5日間「コンフォール松原」で実地調査を実施し、現在の松原団地を計測、撮影した。現状を把握するとともに、より今後の調査のイメージを持ちやすいようにした。③では行政が松原団地に関する資料をどの程度所有しているのか、また市がどのような意識を持ち得ているのか、担当者に聞き取り調査を行った。④では都市再生機構の担当者に③と同様

の観点での質問を行った。⑤も草加松原団地自治会の担当者に聞き取り調査を行った。③④⑤については三機関の考え、特徴・現状をまとめて述べる。⑥は事前調査や、「松原団地に関する資料」の作成のために市内の資料保存の機関にあたる二館で調査を行った。

第三章 調査結果

第一節 松原団地の保存状況、実地調査

前節において記述した通り、現在の松原団地の歴史とその保存状況を5日間にわたる実地調査を交えながら調査した。本節ではその調査結果について記述する。

松原団地は先述の通り、日本住宅公団によって1962年（昭和37年）建設された住宅団地である⁵。東洋最大のマンモス団地と呼ばれ⁶、都心まで直通の東武伊勢崎線（現東武スカイツリーライン）の沿線という立地も影響して大人気の住宅団地となった⁷。元々は「丁張耕地」という田畑が並ぶ地域だったが、松原団地建設によって住宅街へと変貌を遂げた⁸。団地はA B C D地区の四つに区域分けされ【地図2】、4階建ての全324棟、5926戸からなっている住宅団地である【地図3】⁹。現在は2003年に開始した建て替えを2018年（平成30年）6月に完了し¹⁰コンフォール松原と名前を変え高層マンションが立ち並ぶ団地となっている【資料1】。建物自体を高くすることで、A B地区のみで5,926戸以上を確保している。よってC地区の大半は取り壊され現状利用されていないが、一部が松原団地記念公園として利用されている【資料2】。D地区に関しては現存するが立ち入り禁止となっており周囲は巨大な壁でおおわれている【資料3】¹¹。コンフォール松原敷地周辺に松原団地に関する記念碑や松原団地に関する展示パネルなどは1つも作成されておらず¹²、資料保存は史跡として残す姿勢はあまり見られないと指摘できる。一方で最寄り駅の「獨協大学前（草加松原）」では、東口にある江戸期の宿場町の史跡を伝える「草加松原」に関する情報が多く展示されていることが見て取れた【資料4】¹³。今回の実地調査で江戸期の宿場町としての草加松原の保存は積極的であることは再確認した【資料5】¹⁴。

草加市役所、都市管理機構、草加市郷土資料館に松原団地を取り扱った資料が何かしら残ってないかという趣旨で直接複数回訪問し、綿密な聞き取りを行ったが、資料の存在を確認することは出来ず、当該機関の回答も体系的に松原団地に関する資料集や文献は存在しないとのことだった。草加市郷土資料館も見学・調査を行ったが、草加松原団地を取り扱った資料は全8室の展示のうちごくわずかであった【資料6】¹⁵。保存状況調査、実地調査を行った結果、我々は当初考えていたより松原団地の保存や「記憶の伝承・記録の体系化」が進んでいないという結論を持つに至った。また周辺の江戸期を中心とした前近代の史跡保存は積極的に行われていたが、団地の保存は建物としても資料としても意識の埒外にあり、後回しになっているように見受けられた¹⁶。我々はそこで団地の保存を行うと考えられる機関に対し、このような状況に対して具体的にどのような認識を持ち、対応を行っているのかの聞き取り調査を行うことにした。該当機関は先出の松原団地のある自治体にあたる草加市役所、現在の管理会社である都市再生機構、また民間ベースで団地に対しての取り組みを行うであろう、自治会の松原団地自治会の三機関である。

第二節 該当機関への聞き取り調査

第一節の結果をもとに、我々は草加市役所、都市再生機構、松原団地自治会に協力を得て、2018年（平成30年）8月20日に質問状を送付した。市役所からは当初、「早急な対応が難しい」とのこと書面での返答があった。また8月31日に都市再生機構において

は直接聞き取り調査を行うことができた。さらに後日不明瞭な点も追加で書面において回答があった。自治会には9月9日に直接聞き取りを行い、了承を受けたうえで議事録をとり、活字化を行った。三者への質問状内容は【資料7】の通りである。

草加市役所では広報課の戸賀崎氏、広聴相談課の黒須氏、都市計画課（広聴相談課の黒須氏が問い合わせ続けていた返答のため担当者氏名不明）の担当者から了承・回答を得た。まず、3名の市役所担当者から得られた現在の草加市としての認識は、「松原団地を後世まで残す歴史的価値はないと考えている」との内容であった¹⁷。松原団地の現状に関しては建て替えが完了したという認識だった¹⁸。これからの資料的保存の方針についての質問に対しては、明言はなかったが、返答を見る限り、団地は都市再生機構が運営している住宅であり行政が介入する必要はなく、また保存をしていく必要性も考えていないように見受けられた¹⁹。草加松原団地の歴史の資料を市が所持・管理をしているのかの問いには2006年（平成18年）以降の市の広報新聞が残っているとの回答だった²⁰。この後実際著者が調査したところ松原団地のみに関する記事は2記事のみで地域住民のコメントと写真が掲載されたものだった【資料8】。しかし並行した資料調査で建て替え方針に関する文書を見つけた【資料9】²¹。松原団地は住宅地として開発されていく予定と記されていた。団地の保存とは離れたものではあるが、建て替えに関する資料は事業が近年なため現存していた。市の郷土資料館に資料の有無を聞き取りしたときには「新草加」という草加市議会議員だった渡部務氏が発行していた新聞の紹介があった【資料10】。その資料には松原団地に関する記載も多くあったが、一般公開もされていないうえに館長しか新聞の存在を把握しておらず、共有の資料となりうる上で万全な現状ではないと考えられた²²。

都市再生機構ではストック事業推進部事業第5課の細井梨沙氏から回答を得ることができた。都市再生機構としてはいわゆる「事業史」などは作成しておらず、資料として残っているものはないとのことであった²³。草加松原団地に関する建設の経緯なども残っておらず、団地内の生活の諸相や団地の祭りなど、当時の生活を把握するものなどに関しても資料は全く残っていなかった²⁴。建物の値段などに関しては資料があったことから、都市再生機構は当然のことながら、松原団地の保存に関する意識は低く、あくまで自社の住宅商品といった考えが根底にあることと見受けられた。しかし2003年に自治会が作成した40周年の歴史に関する冊子の写真提供などはしており、依頼されたらいつでも見せられる資料は提示できるというスタンスだった²⁵。聞き取りをする中で管理会社が資料保存をしていくことは、商用の史資料以外には難しさもあり、総合的な保存を期待していくのは困難であるかのように感じた。全国にいくつもの団地を管理している都市再生機構に「事業史」の分析・作成などの余裕はなく、分析・作成に予算や人員を割く余裕がないように感じ、難しさを感じた。管理会社として「事業史」を作成し分析することは今後の住宅事業を考えるうえでプラスになるだろう。しかし保存・作成・分析の労力や時間を割く「ゆとり」というものが企業には薄弱ではないかと指摘できる。民間機関は営利を迫及する性質がある。営利性のない文書保存の優先度は低くなると考えられる。

自治会では自治会長の安田昌晃氏、事務局長の小林光雄氏に回答いただいた。回答では、自治会としては資料の保存はしようとしているが、多忙なためなかなか着手できないとのことだった²⁶。実際に松原団地に住んではいるが団地を歴史的価値のあるものとはあまり考えていなかったと話していたが、そろそろ60周年を記念した冊子を作成したいとの回

答だった²⁷。しかし聞き取りの際、自治会事務所を見学させていただいたが、自治会報（月2回発行）は創刊号からすべて保存されているうえ【資料1-1】、近接されている獨協大学の地域総合研究科の作成した松原団地に関する記事なども保存されており【資料1-2】、資料としては十分すぎるような量であった²⁸。住民ということもあり松原団地の歴史から建設当初からの自治会の成果、そして現状の問題などにも細かく話していて自治会の活動の活発さは史資料の体系的保存の面においても、松原団地の歴史的な記憶・記録の面においても非常に期待できるものだと感じた²⁹。一方上記のような「制約」もあり、建て替え問題などで団地40周年の際に作成した冊子以降、団地に関するものはまとめておらず、団地を伝えるという点では十分に発信・発揮しきれていない部分もあることを指摘することができる。自治会の存在もインターネットなどにも載っておらず、いつもアクセスが可能な市の公共機関などには遅れを取っており、史資料の共有化・活用化というアーカイブ的な観点においても課題が多く、我々も実地調査で存在を知った。保存している資料や活動量、資料作成も簡易的なものではあるが豊富で充実しており、3機関の中で一番体系的な資料保存の観点では自治会が優れていると断言できるが、逆にその資料を発信・共有化できていないことが、松原団地の資料保存が進んでいないこと、体系化されていないことの原因であることが分かった。その自治体も含め、3機関とも現状に関して、近年の「建て替え事業」がようやく終わったためか、資料の体系的保存・松原団地の歴史の共有化などに対し、そこまでの問題意識がないように見受けられた。松原団地の保存を主導していくことが可能な機関自体が問題意識を持たなければ資料保存も積極的に行われないことがわかった³⁰。市は資料自体をしっかりと把握しておらず、管理会社は保存の仕事は業務の優先順位において閑却され、自治会は資料を保有しても、体系的に活用・共有化できずにいるという現状はこの3機関が資料保存をすぐさま行えるような状況になく、方法と意識の創出の上で時間がかかるということを示している。

第三節 調査後について

このほかにもマンモス団地として有名なひばりが丘団地や赤羽団地の保存状況についても調査したが、資料館なども存在せず保存が進んでいない団地はやはり草加松原団地が例外でないことが分かった³¹。社会史的にも生活史、文化史を後世考えていくうえでも団地史として近年研究対象として注目が高まる「団地」ではあるが³²、50年程度しか経過していない建物や当時の記憶・記録を保存するという意識はなかなか生まれないのはいかと考えた。草加松原団地の最寄り駅でも団地ではなく反対出口側にある500年近い歴史のある草加松原の保存・体系化には積極的な様子であることが見受けられ³³、我々の問題意識は、団地と近世の草加松原の対比とともに、歴史というものは過去を大きく離れることでしか成立しえないのかという疑問に至り、たとえ理解されても「優先されない」可能性が高いという現状の問題点を浮き彫りにした。我々は3機関への聞き取り調査を終え我々の問題意識の差が大きく、保存活動は市民や住人の努力も必要であるとの結論に至った。そして我々の手で自治会の所有する資料や各機関が断片的に所有する資料、郷土資料館からお貸しいただいた「新草加」を再集成し、編纂し独自の資料集を作成し、各機関に寄贈するという考えに至った。当該機関によらず、第三者の手でこれを作成することである。また専用のホームページを我々自身の手で作成しその資料を電子ファイルなどで掲載し、民間発信のデジタルアーカイブシステムとして、気軽に誰もが閲覧できるように企図した。

本編の資料編にも掲載したかったところではあるが、当該のウェブサイトのリンクを掲載する。このウェブサイトには先述の資料や我々がそれら資料を基に記した「松原団地概説通史」が掲載されていて、今後の周囲の評価を得たいとも考えている。作成したホームページは下のリンクから閲覧できる。

<https://sites.google.com/kaichigakuen.ed.jp/matubaradannchi2018kenkyuu/>

ウェブサイトの写真は【資料13】の通りである。全16ページとなっており団地の歴史を中心にまとめた。作成後草加市郷土資料館、草加松原団地自治会に寄贈させていただいた【資料14】。

第4章 考察

今回の調査でまず、松原団地の「巨大さ」を再確認した。実地調査で団地内を回ったが予定の時間をはるかに超えることもあり³⁴、建物の個数など実際に見てみると当時の松原団地の規模は現在より大きく、市に与えた影響は小さくないと容易に想像がついた。更に日本の住宅や生活文化に与えた影響も多大であると感じた。しかし行政などが優先して保存をしていくのは行政が「価値がある」と判断した、長い年月の経ったものである。建設されてから55年程度しかたっていない松原団地が保存されるのはいつになるか検討がつかず、その間にも団地の保存しなければならない資料は減っていく。早急な対処が必要である。当時の歴史を「復元したい・再構築したい」と考えた時に体系的な史資料が散逸しては歴史を復元することは困難となる。古代・中近世の生活文化を「再現」することの困難さを再度このフィールドで「経験」するわけにはいかないのである。これは松原団地のみならず、メジャーでない史資料の文書保存管理の問題全般に対して指摘できることである。近年団地史という研究ジャンルが注目されてはいるが、草加松原団地の研究を行ったのは獨協大学の地域研究所や同大学生徒のみである³⁵。行政も管理会社も興味を持たなければ草加松原団地の保存は進まないのだろうと感じた。しかし幸いなことに、草加松原団地自治会は精力的な活動を行っており、松原団地に住民は関心を持っている。だからこそ、住民主体での資料保存という活路も見いだせる。いわゆる「草の根アーカイブズ」である。行政や民間企業ではなく自治会や市民がアーキビストとして史資料保存活動を行っていくという資料保存活動の形である。市民が行動しないと保存されづらい近代の歴史的価値のある建築物は次々と無くなっていくと思う。しかし行政が管理しているものではないが、市に影響を与えた巨大団地ということで保存活動を行えば、我々のような学生より豊富な資料作成ができ後世に正しく松原の歴史を伝えられるのではないかと考えた。

つまり裏を返せば市民や住民の活動や認識の高まりというものがなければ地域伝統や歴史的資産の体系的な保存継承は難しいということだ。市民や住民の活動によって松原団地の暮らしは改善されていった。それと同様に保存が進んでいないから進めてほしいといった声があれば問題意識のない行政は動かない。改善することを発信していけば、現在の松原団地の保存状況も改善されるのだと思う。今回の研究と成果の「報告」は行政に現状を伝え、問題意識を共有し改善させていくのに大きな影響を与えたと我々は考えている。寄贈した資料集は現在存在する松原団地の歴史のみをまとめた唯一の資料集成であり³⁶、この資料集の作成は松原団地の資料保存に関して大きな成果だといえる。これからも積極的な自治会と行政と意見交換を行い、協力して松原団地のさらに細かい資料、後世への伝え方について研究、作成して行動していきたいと思う。

【資料編-註釈編】

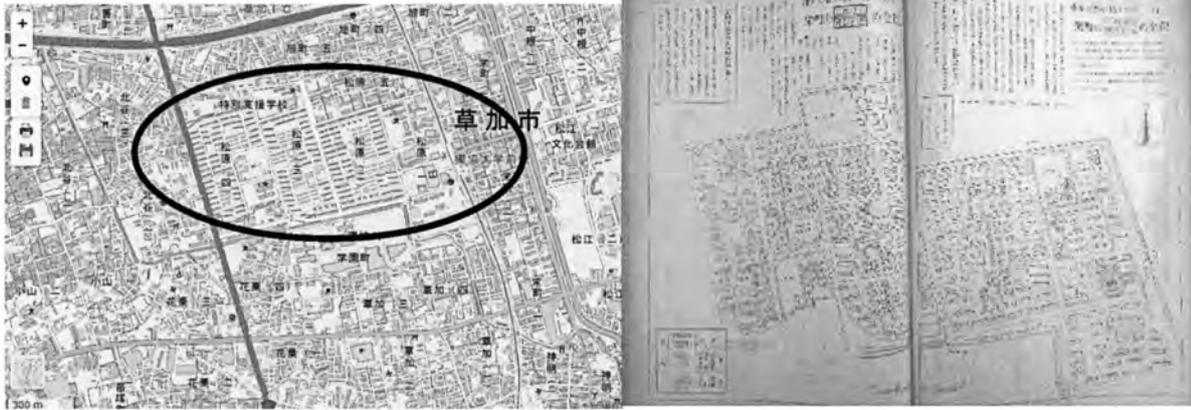
- 1 「草加市郷土資料館内松原団地説明文」（草加市郷土資料館館内にあり）より
- 2 例えば、原武史『団地の空間政治学』（NHK 出版、2013）、また西脇和彦「昭和 40 年代の生活世界（その 1～3）—新聞記事にみるアパート団地・ニュータウン・郊外住宅—」（『学苑-近代文化研究所紀要』No. 827、2009. 9）」など
- 3 2018 年 7 月 29 日の事前聞き取り調査より 「お求めの資料は見つからない」という発言があった。
- 4 草加市郷土資料館内松原団地説明文より、「草加松原団地は 1962 年（昭和 37 年）に旧日本住宅公団によって建設された。東洋一のマンモス団地とも呼ばれ、交通の便からも大人気の住宅となり（中略）元は丁張耕地と呼ばれる田園だったが（以下省略）」という内容がある。
- 5 註 4 と同上。
- 6 註 4 と同上。
- 7 註 4 と同上。
- 8 註 4 と同上。
- 9 草加松原団地自治会作成冊子「草加松原団地 40 年の歩み」（草加市立中央図書館 2003）より。
- 10 2018 年 7 月 29 日都市再生機構の細井氏への聞き取りより判明。
- 11 資料編【地図 2】参照。
- 12 実地調査で確認。
- 13 註 12 と同上。
- 14 註 12 と同上。
- 15 2018 年 8 月 6 日の実地調査で草加市郷土資料館内における実地調査で泊氏より確認している。
- 16 2018 年 8 月 6 日の実地調査で草加松原の垂れ幕や資料館兼展望台の矢倉、草加松原内にある甚左衛門堰の立て看板を確認した。
- 17 2018 年 8 月 20 日の市役所回答本文問に対し黒須氏より「松原団地の価値、そのような考えはなかった」という回答を頂いた。
- 18 2018 年 8 月 20 日の資料編【資料 7】問 7 に対し市役所側黒須氏の回答からは「建て替えが終わったことが大きい」という回答があったことからわかる。
- 19 2018 年 8 月 31 日の都市再生機構への聞き取り調査、細井氏への質問シート【資料 7】問一に対する返答「そのような考えはございませんでした」という発言より。
- 20 2018 年 8 月 20 日の市への聞き取りより 黒須氏より回答を受けた際の内容である。
- 21 草加市役所ホームページ <http://www.city.soka.saitama.jp/> より、都市整備部平成 29 年度資料。
- 22 2018 年 9 月 9 日の草加市郷土資料館訪問の際館員の証言「館長以外把握していないもので」という発言より判明。
- 23 2018 年 8 月 31 日の細井氏への聞き取り調査より判明。
- 24 註 23 と同上。
- 25 2018 年 8 月 20 日都市再生機構へのアポイント依頼の際の細井氏の発言より
- 26 2018 年 9 月 9 日自治会への聞き取りより

- 27 註 26 と同上
- 28 註 26 と同上
- 29 2018 年 9 月 9 日の自治会聞き取りの際予定時間 40 分に対し、2 時間 10 分に延長していた。
- 30 聞き取りした三機関に保存状況に対する問題意識がなかったため。
- 31 ウェブサイト北区役所ホームページ <http://www.city.kita.tokyo.jp/>
西東京市役所ホームページ <http://www.city.nishitokyo.lg.jp/> より判明。
- 32 原武史『団地の空間政治学』（NHK 出版、2012 年）等より
- 33 9 月 9 日の草加松原実地調査より、【資料 4】より。
- 34 例えば我々の調査においても、調査時間は「草加松原団地」全体を回るのに 1 時間半かかった（徒歩による調査）。
- 35 2018 年 9 月 9 日の自治会聞き取りの際「松原団地の研究はそんなに行われたい、獨協大学にある研究室と、（獨協大学の）学生の卒論くらいだよ」という発言より。
- 36 例えば『草加松原団地 40 年のあゆみ』（草加松原団地自治会、2004 年）は全 9 ページの冊子なうえに、ほとんどが写真であり当該の歴史などには触れていない。

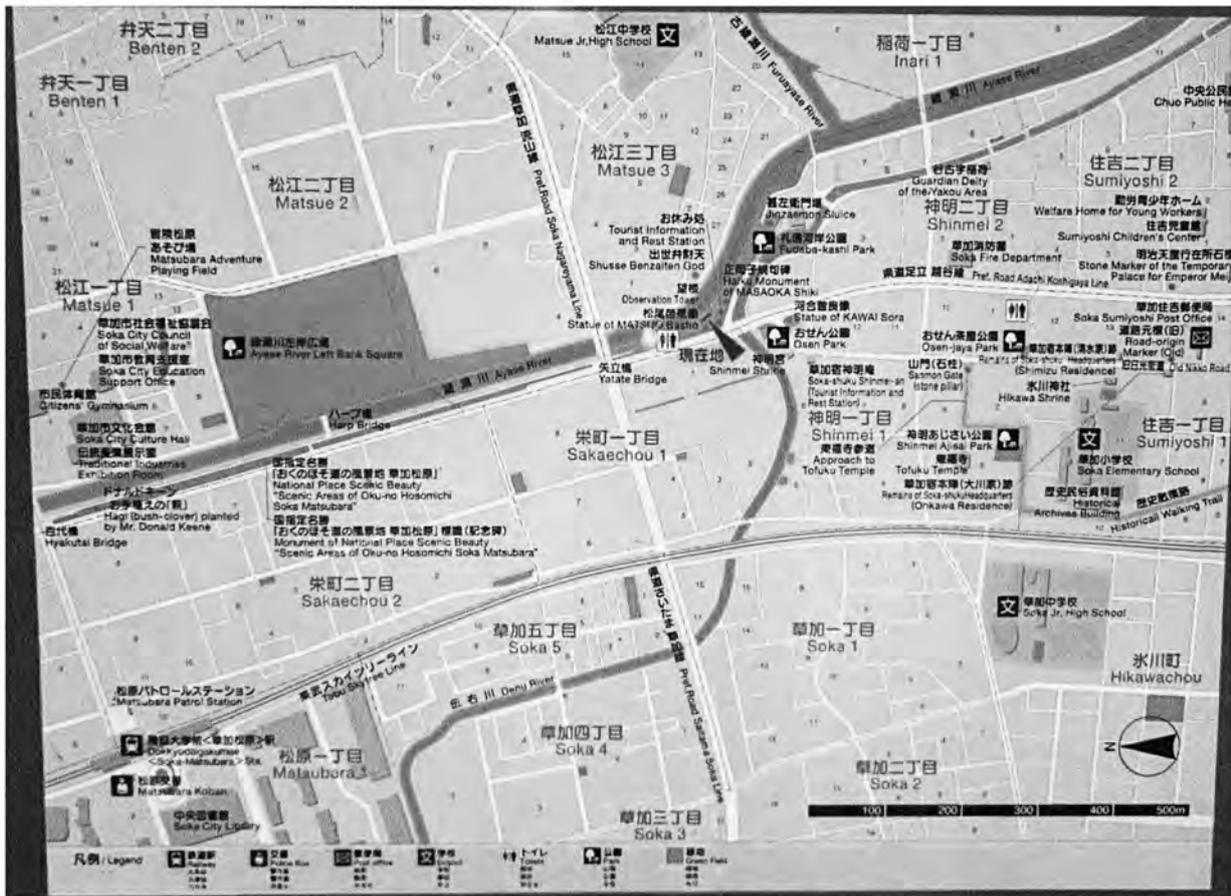
【参考文献】

- 『草加市史 通史編 上・下』（草加市役所 1997）
- 『草加市史 民族編』（草加市役所 1985）
- 『草加市史 資料編 I・II・III・IV・V』（草加市役所 1985）
- 『草加松原団地 40 年のあゆみ』（草加松原団地自治会 2004）
- 『広報そうか』（草加市役所 2006）
- 『会報まつばら』（草加松原団地自治会 1963）
- 『自治会報』草加松原団地自治会発行（草加松原団地自治会 1963）
- 『草加松原団地まちづくり計画』（松原団地の建て替えを考える会 2008）
- 『自治会作成地図』（草加松原団地自治会作成）（建て替え後団地内地図は作成されていないため）
- 原武史『団地の空間政治学』（NHK 出版 2012）
- 渡部務『新草加』（個人製作 1950～1969）
- 西脇和彦「昭和 40 年代の生活世界（その 1～3）—新聞記事にみるアパート団地・ニュータウン・郊外住宅—」（『学苑-近代文化研究所紀要』No. 827、2009. 9）

【地図1】 (国土地理院から引用) 丸が当該地域を指す 【地図2】 (『新草加新聞』より 撮影は著者)



【地図3】 (草加松原の立て看板、撮影は筆者)



以下の写真は全て著者撮影

【資料1】現在の「コンフォール松原」



(著者撮影)

【資料2】松原団地記念公園



(著者撮影)

【資料3】立ち入り禁止区域を示す壁



【資料4】江戸期の草加松原を示す情報展示



(著者撮影)

【資料5】草加松原-「甚左衛門堀」に関する史跡保存の現況



(著者撮影)

【資料6】草加市立歴史民俗資料館



館内唯一の案内板



【資料7】自治会・市役所・都市再生機構への質問内容

- 自治会への調査
- 問1 自治会の歴史について教えてください。
 - 問2 松原団地の資料を自治会は保存しているか、またどのくらいか。
 - 問3 自治会は具体的な活動として何を行っているか。
 - 問4 松原団地を保存していく気はあるか。保存する価値があると考えるか。
 - 問5 現在の保存状況についてどう考えているか。
 - 問6 市との協議などできなか協力して行っていることはあるか。
 - 問7 都市再生機構との協議などは何かしているか。
 - 問8 議員の人数減などコンフォールになってから何か変わったか。
- 市役所への調査
- 問1 市が所有している松原団地の資料はどれくらいあるか。
 - 問2 市として松原団地にどうかかわっているか。
 - 問3 松原団地を歴史的遺産と考えているか。保存していく考えはあるか。
 - 問4 なぜ駅名変更を東武鉄道に依頼したか。
 - 問5 現在の保存状況をどう考えているか。
 - 問6 市として松原団地について把握している歴史を教えてください。
 - 問7 都市再生機構や自治体と協力して行っていることはあるか。
 - 問8 松原団地が草加市に与えた影響は何と考えているか。
- 都市再生機構への調査
- 問1 松原団地の資料をどれくらい持っていますか？
 - 問2 松原団地の管理とはどのようなことを行っているのか？
 - 問3 松原団地を歴史的遺産と考えているか？
 - 問4 これから松原団地を保存していく気はあるか？
 - 問5 現在の保存状況をどう考えているか？
 - 問6 自治会や行政とどのようなかわりをもっているか？
 - 問7 コンフォールにたて変わってから変わったことはなにか？

【資料8】『広報そうか』（自治体報）松原団地に関する記事（市役所の紹介で唯一現存していた史資料）



(著者撮影)

【資料9】建て替えに関する「草加松原団地まちづくり計画」

【資料10】広報誌「新草加」



(著者撮影)



(著者撮影・草加市郷土資料館蔵)

【資料 11】 草加松原団地自治会事務所の文書管理状況



(著者撮影)

【資料 12】 獨協大学による年刊『地域総合研究』2008年～2018年（松原団地に関する研究も見受けられる）



(著者撮影)

【資料13】我々が作成したウェブサイト『草加松原団地歴史資料集』ホームページの画面
(URLは <https://sites.google.com/kaichigakuen.ed.jp/matubaradannchi2018kenkyuu/>)



【資料14】自治会・歴史資料館に著作作成『草加松原団地資料集』謹呈・意見交換の様子 (上下)





長野電鉄絵地図における幻の社名から探る

小林一三・神津藤平の先見的鉄道経営構想



長野県須坂高等学校 宮崎愛斗



はじめに ～研究の動機と方法～

鉄道の歴史に興味を持ち始めたのは、幼いころ博物館で地元の鉄道に関する企画展示を見に行ったことから始まる。明治から大正時代に製糸業が盛んだった須坂の街には大正まで鉄道が敷かれず苦労したが、製糸家たちの尽力で最寄り駅を設置し、最終的に須坂を中心とする鉄道網を作り上げたという内容は今でも鮮明な記憶として残っている。高校生となり、鉄道史の他、郷土史の知識を深めるために須坂市立博物館にボランティア会に加入した。活動の過程で、生糸輸送も含め、須坂の近代化に大きく貢献した地元長野電鉄の絵地図が博物館に収蔵されていることを知った。絵地図とは大正期に相次いで発行されたもので、写真では味わえないカラフルな色彩に、可愛らしいイラストが描かれた鳥瞰図型鉄道路線図が楽しめる。私は感銘を受け、それにまつわる個人研究をすることに決めた。収蔵品の「長野電車名勝案内」には驚くべきことに、現在社史や新聞で確認することのできない社名「長野鐵道」が印字されていた。長期にわたる研究の結果、その社名は大正15年、長野電鉄誕生の3か月間のみ存在した電鉄の旧称であると結論づけた。社名の変更理由には鉄道経営に欠かせない、乗客の列車に対するイメージが浮かび上がった。また、初代長野電鉄社長が阪急電鉄社長の小林一三から影響を受け、実現に向けて奔走した私鉄経営構想も判明した。本稿では大正・昭和における地方私鉄の勇躍を絵地図から探る。

研究は須坂市立博物館の収蔵資料「長野電車名勝案内」の記述を解説したほか、前述の社名は公の資料に存在しないため仮説を立てて論じた。また、電鉄沿線の古書店及び須坂市文書館にも出向き、調査を行った。

1 長野電鉄の歴史

長野県北部、善光寺で有名な長野市中心部からスキーのメッカである志賀高原ふもとの駅、湯田中までを結ぶ地方私鉄「長野電鉄株式会社」（以下長野電鉄）がある。長野電鉄は大正15年に既存の鉄道会社二社を合併し誕生した。二社はそれぞれ千曲市屋代から千曲川東岸に沿って須坂市を抜け、木島平村にいたる河東鉄道株式会社（以下河東鉄道）、長野市内から須坂市へと鉄道を敷いた長野電気鉄道株式会社（以下長野電気鉄道）である。

（図1）河東鉄道は大正11年に敷設された路線である。明治26年に長野経由で開業した信越線（高崎～直江津間）の恩恵を受けられなかった須坂など千曲川東岸地域の人々によってもたらされた路線で、特に製糸業者にとって鉄道開業は悲願の達成であった。沿線から熱烈な歓迎を受けた河東鉄道はその後も延伸を続け、大正12年に須坂～信州中野間、大正14年には信州中野～木島間が開業し、全50.4キロの鉄路が完成した。同じころ、町村合併に伴い西岸の長野市内でも、私設鉄道建設への機運が高まった。河東鉄道社長の神津藤平は須坂、長野間の都市間を結ぶ新たな鉄道敷設をすべく別会社長野電気鉄道株式会社を設立。難工事だった長大千曲川を村山橋で克服し、大正15年に須坂～権堂間が開業した。（図1）同じ年の9月に河東鉄道と長野電気鉄道は互いに円滑な業務を行うため合併を遂げ、長野電鉄株式会社と社名を変更し現在の長野電鉄に至っている。社長の神津藤平という人物は、阪神急行電鉄の創業者である小林一三と盟友であった。二社の合併後、長野電鉄の初代社長としても邁進した神津は、盟友の影響を強く受け、共に訪れた自然豊かな深山を志賀高原と名付け、以後、渋温泉などの開発に邁進した。神津は鉄道と観光を大々的に結び付けた実業家として、県内で有名な人物である。

観光開発を進めた長野電鉄は大正～昭和初期にかけて自社路線を大々的に紹介する鳥瞰図形式の観光案内を数多く発行した。(図2)

2 仮説と検証

絵地図『長野電車名勝案内』表紙に掲載されている「長野鉄道」とは何を示すものか長野電鉄社史や当時の新聞記事、長野電鉄本社の方においても確認できない社名のため、下記のとおり仮説をたてて検証を試みた。

- 1-1 仮説Ⅰ 「長野鉄道」とは「長野電気鉄道」の略称である。
- 1-2 仮説Ⅱ 「長野鉄道」とは「河東鉄道」が単独で社名変更をした際の名称である。
- 1-3 仮説Ⅲ 「長野鉄道」とは河東鉄道と長野電気鉄道の合併における新たな名称である。

「長野電車名勝案内」をもとに、長野電気鉄道や河東鉄道との関係性を軸に検証を行ったところ、仮説Ⅲが最も支持できることがわかった。判断の理由は次のとおりである。

- 1-1 仮説Ⅰ「長野鉄道」とは「長野電気鉄道」の略称である。

これについては株式会社の表記を含めた正式な社名が掲載されている部分を調べた。すると裏面地図案内本文中に「長野鐵道遊覧案内」・「長野鐵道の現営業線は・・・」という冒頭部分(図3)がある。また、正式な発行元の記載を確認したところ「長野鐵道株式会社内・・・」(図4)という部分を発見した。一方で「長野電気鉄道」の記載は一切みられないことから長野電気鉄道が長野鉄道を等しく意味する略称ではないとわかる。以上、発行元の正式名称から長野鉄道と長野電気鉄道は別の名称と判断することができ、仮説Ⅰは適切でないと考えられる。

- 1-2 仮説Ⅱ「長野鉄道」とは「河東鉄道」が単独で社名変更をした際の名称である。

これは表紙の「河東鉄道改称長野鉄道株式会社」(図5)という記述から設定した仮説である。現在の長野電鉄は冒頭のとおり設立時期や目的の違いから河東鉄道と長野電気鉄道の別会社が設立され、列車を運行していた。事業改善のため2社は大正15年9月に合併するが、絵地図発行日は合併直前の7月25日であるため、河東鉄道が合併前に単独で長野鉄道と名称を変更したと推測する説が仮説Ⅱである。しかしながら次の2つの点からこれは適切でないとわかる。はじめに、河東鉄道と長野電気鉄道の合併話は15年3月の時点で発生していた。社長も同一で社員も共通していた2社のうち河東鉄道のみ社名変更したことはその目的を見出すことができず不自然である。次に絵地図内面に河東鉄道が敷設しなかった路線が含まれている点を挙げる。長野線(図6)や平穩線(図7)は長野電気鉄道や合併後の長野電鉄により敷設された路線である。長野線は大正15年に長野電気鉄道により、平穩線は合併後の昭和2年に長野電鉄線の一部として開業しているため、河東鉄道改称の長野鉄道が発行した絵地図に掲載できるはずがない。以上の2点から「長野鉄道」を河東鉄道単独での社名変更とみることはできず仮説Ⅱは適切でない。

- 1-3 仮説Ⅲ「長野鉄道」とは河東鉄道と長野電気鉄道の合併時における新たな名称である。

仮説Ⅱで述べたように絵地図には2社の路線が同じフォント・デザインで併記されている。よって絵地図は両者の合併を見据えて作られたものと思われる。また、背表紙に合併後に設定された長野電鉄の社紋（図8）が描かれている点からも仮説3は明らかである。3社にはそれぞれ独自の紋章（図9）が存在しており、仮に発行元が河東鉄道や長野電気鉄であるならば各々の社紋を使うはずである。以上の点から「長野鉄道」とは河東鉄道と長野電気鉄道合併時における全く新しい名称ととらえることができる。なお、長野電鉄社史及び信濃毎日新聞にはこれら長野鉄道に関する記述は見つからず、現段階で仮説3を否定することはできない。

1-3-1 仮説3を裏付ける絵地図の発見と聞き取り調査

仮説3に基づき暫定的な名称である「長野鉄道」で発行された出版物が『長野電車名勝案内』のほかに存在しないか平成30年4月14日（土）に長野市内の古書店を訪ね調査を実施した。すると長野市西後町、信大教育学部前の古書店「新井大正堂」に3点の沿線案内が販売されていることがわかった。驚くべきことにそのすべてが大正15年長野鉄道株式会社発行の鳥瞰図であった。それぞれ『長鉄沿線 中野名勝案内』・『長鉄沿線 北信の仙境山田温泉案内』・『信州第一の仙境 野沢温泉名勝案内』であった。（図10）内面の絵地図は市立博物館所蔵の絵地図『長野電車名勝案内』と全く同一であることが特徴（図11）で、裏面名勝案内がそれぞれの観光地ごとに変化している。『長野電車名勝案内』が鉄道沿線の総合ガイドであるのに対し今回の史資料は各々の観光地に特化した絵地図であったと推測される。以上の調査と発見から長野鉄道が発行した絵地図は少なくとも4種類あることが判明した。絵地図のうち2種類（『長鉄沿線 中野名勝案内』・『長鉄沿線 北信の仙境山田温泉案内』）は発行日が異なっており購入し詳しい調査を行ったところ、おおよそ1か月のずれがあることが分かった。図表編に掲載したとおり（図12）『長鉄沿線 北信の仙境山田温泉案内』は発行日が大正15年7月1日であるのに対し、『長鉄沿線 中野名勝案内』においては発行日が大正15年8月10日となっていた。発行日におよそ1か月間の間隔があることと長野鉄道が発行元であることから、長野鉄道という名称が約1か月は存在していたと解釈することができる。

また名勝案内について販売元の古書店「新井大正堂」代表取締役新井克文氏に聞き取り調査を行った。新井氏によれば本絵地図は書店創業者である祖父新井義勇氏が大量に入荷したものであるという。現在売り切れの『長野電車名勝案内』（博物館所蔵と同一品と確認済み）を含め全部で4種類全てを販売していたとのことであった。

以上の聞き取り調査から長野鉄道発行の各名勝案内は一般に広く流通していたと考えられる。「長野鉄道」という名称を合併前の数か月のみ存在したとする仮説3はより史実に近いであろう濃厚な説となった。

1-3-2 仮説3を裏付ける時刻表の発見

平成30年4月28日

長野電気鉄道開業時『列車時刻表』よりわかること

長野鉄道関連の資料を発見するため調査の幅を須坂市文書館にまで拡大した。須坂市文書館は平成20年より市誌編さん室として行ってきた活動が終了したことによって歴史史資料を一般向けに公開するために平成30年に改組された機関である。市誌編さんで使わ

れた史資料はすべて目録化されており、近代においては河東鉄道をはじめとして須坂における鉄道網発展をうかがうことのできる史料が数多く所蔵されていた。大正 15 年 6 月 28 日、長野電気鉄道須坂～権堂間が開業した際の列車時刻表（図 13）からは「河東鉄道との合併後は長野鐵道」との記述（図 14）がみられた。このことから須坂～権堂間が開業した時点で河東鉄道との合併が計画されており、その上、合併時の社名が「長野鐵道」であったということが明確になった。

以上 2 点より事業拡大に即した新社名として「長野鐵道」という名が存在していたことは確実となった。また、一連の史料の発見によって沿線の人々に「長野鐵道」の名が大々的に広告されていたことが判明した。よって「長野鐵道」を合併時における新たな名称とする仮説 3 はより具体性ある資料に裏付けられる結果となった。

1-4 結論

発行時期と絵地図の路線、社紋、時刻表の表記、絵葉書を含め総合的に判断すると、「長野鐵道」とは河東鉄道と長野電気鉄道の合併前に考案された暫定的な名称であると考えられる。「長野電車名勝案内」については、長野鐵道という名称が合併前に社内で考案された際、広報用に用いられたと考えられる。しかし、合併時に何らかの出来事が起こり、社紋は維持したまま、社名のみ「長野電鉄」に変更したと考えられる。社名変更の変遷は次のとおりである。また、略年表を掲載した。（表 3）



3 社名変更の理由と小林一三・神津藤平による先見的鉄道経営構想

長野鐵道から長野電鉄という社名変更の理由は定かではない。しかし長野電気鉄道も踏まえ、「電」の字にこだわりをもっていたことは確かなようである。理由として新線である須坂～権堂間が当初から最新の直流 1500 ボルトを用いた電化鉄道を用いていたことに挙げられる。大正 10 年 7 月 29 日「電化比較調査機関」を立ち上げ、部下に関東・関西のみならず欧米の実情についても研究を重ねたことなどからは神津の電化に対する熱心な研究姿勢が見受けられる。結果、電化鉄道に優位性をみた神津は国内での最新鋭の変電設備を駆使し（図 15）、大正 15 年 2 月より電車の運行を開始した。県下でも珍しい電車の登場であったという。また、30 分おきの過密ダイヤや、権堂～信濃吉田間の複線（図 16）など先見性のある鉄道資本を充実させた。よって新社名には同業者と区別できるような一線を画す社名が求められたはずである。しかし、「長野鐵道」という名称では利用者が近隣の蒸気機関を用いた会社である「飯山鐵道」他（表 1）などとイメージを同じくしてしまう。ここに変更した理由が見いだせる。蒸気鉄道のイメージを払拭し、当時としては珍しい電化鉄道を意識してもらうにはには既存の「長野電気鉄道」をそのまま省略した形の「長野電鉄」が最適だったと考えられるのだ。電化への熱意は絵地図背表紙からも読み取れる。建設が難航した長大村山橋に電車が走っている点（図 17）である。快適な電車を宣伝する社名に決定することは想像に難くない。加えて、長野鐵道社名変更説を支持されている元長野電鉄社員の黒澤真一氏によると電鉄という言い方は当時としては珍しく、ス

マートさを感じさせたのではないかとのことである。事実、「〇〇電鉄」は日本全国の私鉄の社名として定着している。また、「電鉄」への社名変更は関東圏を中心に大正時代から昭和中期ごろにかけて大いにみられる。(表2) 加えて、各々の鉄道会社の社名の変遷を調べたところ、現段階では大正7年、小林一三による箕面有馬電気軌道株式会社から阪神急行電鉄株式会社への社名変更が電鉄を使用する初のケースであったことがわかった。

(表2) それにより長野電鉄における「電鉄」への改称は他の私鉄各社に比べても早期に実現していることも明らかとなった。大正末に既存の社名であった「長野鐵道」を変更してまで「電鉄」に変更している点は小林一三と神津藤平の交友関係に影響していると考えられることもできる。それは大正10年(1921)に小林が療養のために湯田中温泉湯本館に宿泊していたことに遡る。神津藤平と盟友であった小林は二人で後に「志賀高原」と呼ばれる自然豊かな高原に出向き、新しい観光と交通について語り合った。小林はそのころ、阪急電車経営を成功させるべく沿線観光や住宅地の開発を進めていた。快適な電車を走らせ、終着駅には温泉街や宝塚歌劇団を創設を手掛けるなど小林の斬新な経営手腕は現在にも通じているが、同じく長野電鉄社長神津藤平も湯田中温泉・渋温泉をはじめとする湯治場やスキー場の開発を行った。湯田中以北の高原についても美しい自然景観を発見した神津自らが「志賀高原」と名付け開発を進めた。すべては盟友小林との語り合い以降である(表3) ことも踏まえると、神津が、小林から新たな私鉄経営の手法に関して何らかの影響を受けたとしても過言ではないといえる。

1-5 絵地図から読み取る神津藤平の経営方針

神津は先見性あふれる小林の経営構想を模範としたためか両社には共通点がみられる。それは温泉などの観光地を終着駅付近に設ける点である。小林は大正初期に宝塚線宝塚駅に歌劇団を結びつけた。一方で神津は長野線湯田中駅に湯田中温泉、遊園地前駅には遊園地や長野電鉄直営ホテルを設置した。遊園地には食堂や無料休憩所、運動場、小動物園などが設けられ(図18)、当時としては斬新で近代的な施設であったという。終着渋・安代駅は有名な渋温泉郷の最寄り駅(図7)として計画されていた。用地買収の失敗から、くしくも湯田中駅以降の鉄道延伸は実現しなかったが、開業前に制作された「長野電車名勝案内」の絵地図からは活気づく二駅の様子が描かれている。湯田中駅以北には温泉・ホテル・レジャー施設が所狭しと並び、観光に特化した路線を目指す長野電鉄の経営方針を垣間見ることができる。現在、長野電鉄直営ホテルは上林ホテル仙寿閣(図19)として運営されている他、未成線部分は同社経営のバス営業線(図20)となっている。線路は伸びなかったものの、神津の思い描いた終着駅の観光地化は最終的に成功したといえる。

4 おわりに

他の長野電鉄に関する鳥瞰図と比べても、長野電鉄創設前の絵地図は非常に珍しい。特に未成線が掲載されていたり、一時期のみ存在した「長野鐵道」という社名が掲載されている絵地図は長野電鉄黎明期の様子を現代に伝える貴重な史料である。長野電鉄は現在、モータリゼーションの進行で多大なる影響を受けているが、大正時代に神津がイメージした観光地と鉄道の一統経営は今に生きている。常に乗客目線で物事を考えた神津の思いやり精神・おもてなし精神は地元の間人である以上学び、吸収していきたい。

最後になったが、本稿制作あたって助言いただいた須坂市立博物館をはじめとする市職員の方々、長野電鉄、長野電鉄OBの方々にこの場を借りて感謝申し上げます。

【資料編】

図1 河東鉄道及び長野電気鉄道路線図

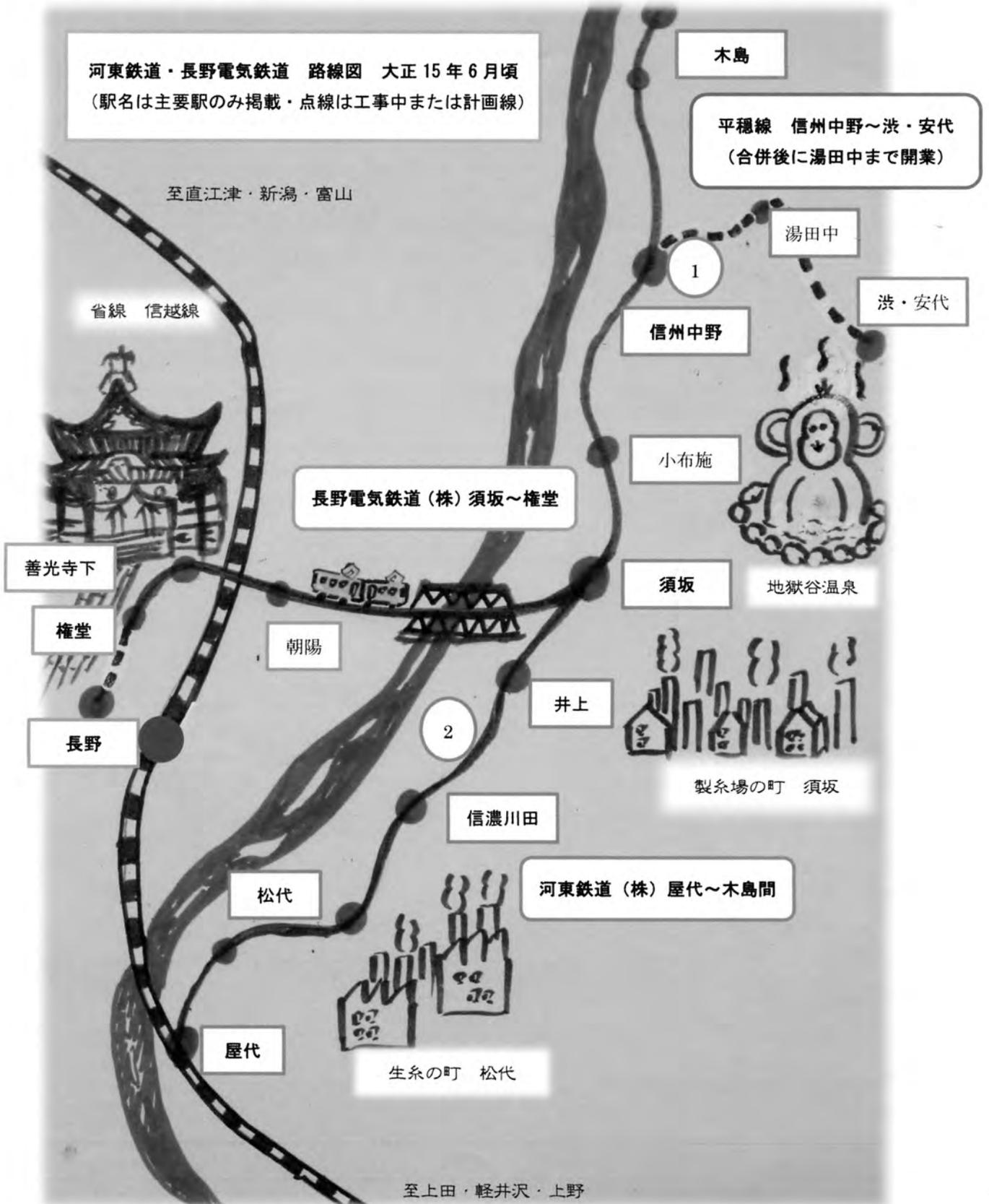


図2 長野鐵道および長野電鉄が発行した様々な絵地図



長野電車名勝案内 澤田栄太郎（長野鐵道発行） 大正15年（1926） （本稿絵地図・須坂市立博物館蔵）



長野電鉄沿線御案内 吉田初三郎（長野電鉄発行） 昭和10年（1935）

大正から昭和の始めにかけて、全国的に鳥瞰図形式に絵地図が人気を博した。絵地図を専門とする絵師も現れ、私鉄各社は自社線の宣伝に奔走した。吉田初三郎は本作以外にも電鉄絵地図を描いている。

（京都歴史館蔵）

図3 絵地図裏面本文

長野鐵道という名称で統一されていることがわかる。

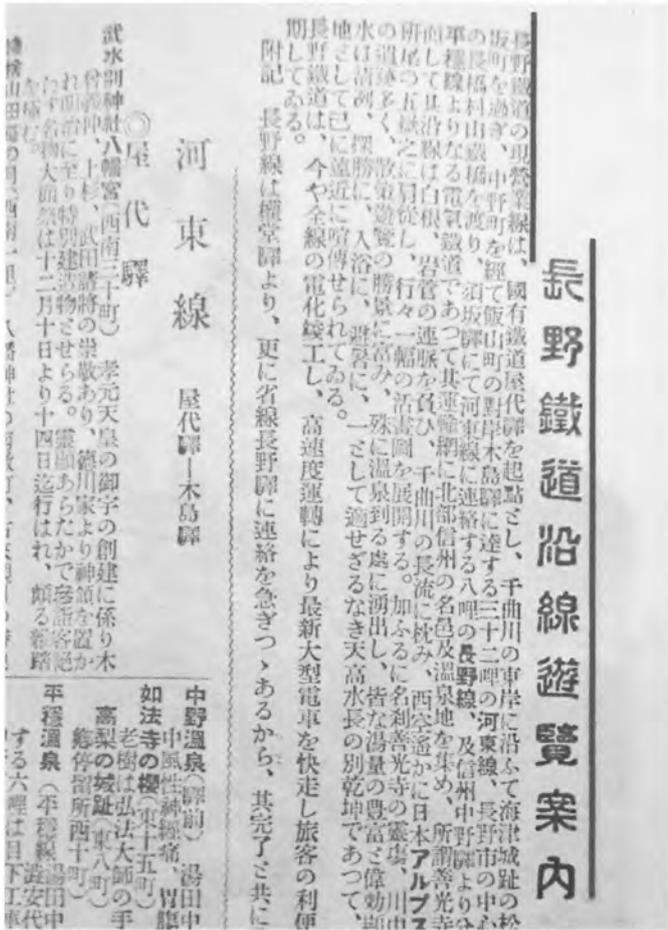
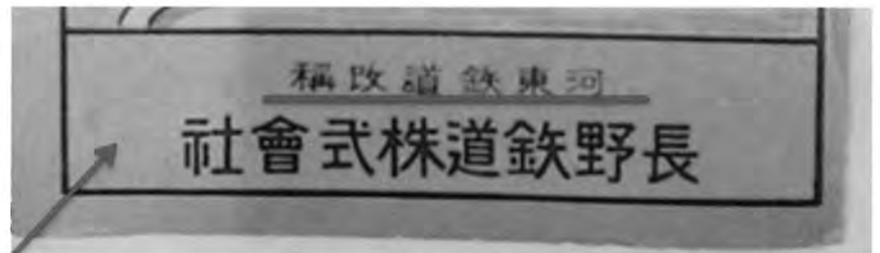


図4 発行年月日・発行元の記述

「長野鐵道株式會社内」の記述がある。



図5 絵地図表紙



右は拡大図。河東鐵道改稱の長野鐵道であったことがわかる。

図6 長野線 (絵地図より抜粋)



須坂～権堂間が大正15年(1926)6月28日に先行開業し、権堂～長野間は昭和3年(1928)6月24日に営業運転を開始した。(須坂市立博物館蔵)

図7 平穏線



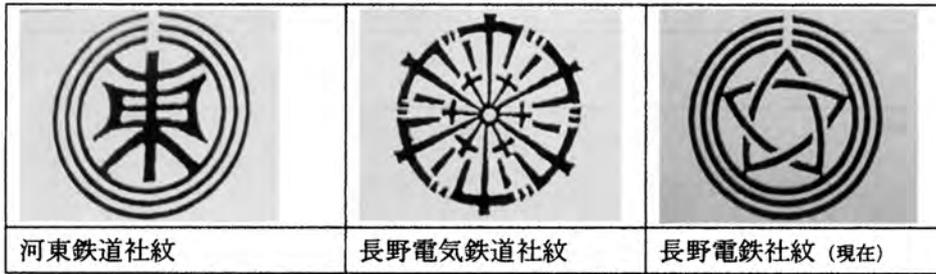
昭和2年(1927)4月28日
平穏線 信州中野～湯田中間の営業運転が開始された。
(絵地図は明瞭さを重視したため、個人蔵のものを使用した。)

図8 長野電鉄社紋



丸囲い部分は現在の長野電鉄の社紋。
(須坂市立博物館蔵)

図9 “三社三様”の社紋



(長野電鉄 80 年のあゆみより抜粋)

図 10



左から『長鉄沿線 北信の仙境山田温泉案内』・『長鉄沿線 中野名勝案内』・『信州第一の仙境 野沢温泉名勝案内』(個人蔵)

図 11



図 12 上から『信州第一の仙境 野沢温泉名勝案内』・『長鉄沿線 中野名勝案内』・『長鉄沿線 北信の仙境山田温泉案内』(抜粋)
絵地図自体は『長野電車名勝案内』に等しい。(個人蔵)

図 12

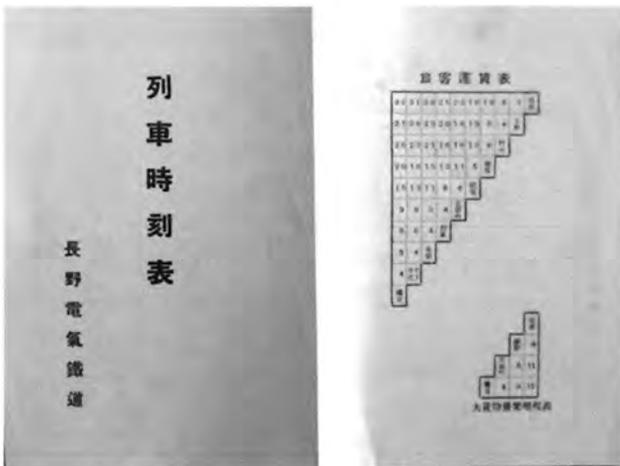


発行日が 大正 15 年 7 月 1 日の『山田温泉案内』



発行日が 8 月 10 日の『中野名勝案内』

図 13



長野電気鉄道 『列車時刻表』表・裏
 (須坂市蔵)

左側拡大図から、時刻表の発行元は長野電気鉄道であることがわかる。しかし、「河東鉄道との合併後の名称は長野鐵道」という記述からは合併 3 か月前にして新会社の計画がなされていたことがわかる。

図 14



同内面

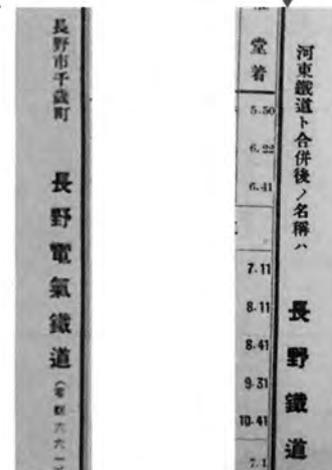


図 15



① 中野変電所

② 綿内変電所（番号は図 1 路線図に対応する。）

中野変電所にはドイツシーメン社製 250kW 回転変流器を 3 台、綿内変電所にはスイスのブランボベリー社製 500kW 水銀整流器 2 台など最新鋭機器を投入した。水銀整流器にいたっては欧米でも歴史が浅く、国内においてはまだほとんど使用されていなかったという。

（長野電鉄 80 年のあゆみより）

図 16



朝陽駅～長野駅間は現在も複線である。

図 18



湯田中遊園地と湯田中食堂（『長野電車名勝案内』絵地図より抜粋）

図 17



村山橋に路面電車風の小型鉄道車両が写っているがその屋根には電車の特徴でもあるパンタグラフがある。

私鉄における遊園地開業は小林一三によって創案された私鉄繁栄策であった。関東で開業が相次ぐ中、信州の奥地に開設した湯田中遊園地は湯治場ではなかった湯田中温泉に一石を投じる画期的な目論見であった。湯田中食堂においては関東から一流西洋料理人と支配人を招いての盛大な開業であったが、経営は苦しかったが昭和 16 年（1941）まで営業していた。

図 19 上林ホテル

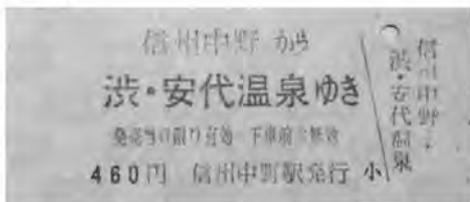


『長野電鐵 沿線名所御案内』 (戦前 個人蔵 一部拡大)

長野電鐵直營の遊園地兼旅館であるとの旨が書かれている。上林温泉とあるが上林ホテルと同じ施設。写真は上林ホテルに設けられた温泉プール。

現在でも上林ホテル仙壽閣として多くの観光客に親しまれている。

図 20



電車・バスの共通乗車券。(個人蔵)

信州中野～湯田中間は電車、湯田中～渋・安代温泉間はバスを利用することで当初の計画を達成した。

表 1 蒸気機関車を使用していた鉄道会社 (大正 14 年頃)

会社名	現在の会社名・線区名	備考
飯山鉄道	JR 東日本 飯山線	現在も非電化
佐久鉄道	JR 東日本 小海線	現在も非電化
信濃鉄道	JR 東日本 大糸線	大正 15 年 1 月電化

表 2

「〇〇電鉄」と社名変更をした私鉄会社と旧社名

社名	左社名に変更した年月日	備考
関西圏		
阪神急行電鉄 (株)	大正 7 年 (1918)	小林一三が箕面有馬電気軌道から改称「電鉄」を使用した初めてのケース
能勢電鉄 (株)	昭和 53 年 (1978)	能勢電気軌道からの改称
広島電鉄 (株)	昭和 17 年 (1942)	広島瓦斯電軌から運輸事業分離
関東圏		
小田急電鉄 (株)	昭和 16 年 (1941)	小田原急行鉄道からの改称
京浜急行電鉄 (株)	昭和 23 年 (1948)	京浜電気鉄道からの改称
江ノ島電鉄 (株)	昭和 56 年 (1981)	江ノ島電気鉄道からの改称
上信電鉄 (株)	昭和 39 年 (1964)	上信電気鉄道からの改称
帝都電鉄 (京王電鉄前身)	昭和 8 年 (1933)	東京郊外鉄道からの改称
長野県内		
上田電鉄 (株)	昭和 14 年 (1939)	丸子鉄道からの改称
長野電鉄 (株)	大正 15 年 (1926)	長野鉄道からの改称

表 3 長野電鉄創設期の略年表を掲載する。(今回の研究で判明したことは太字)

大正 8 年 (1919) 12.22	佐久鉄道が屋代～須坂間の鉄道敷設免許申請
大正 9 年 (1920) 5.3	同免許を取得。動力は蒸気機関
5.30	河東鉄道 (株) 設立。神津藤平社長。資本金 500 万円
大正 10 年	小林一三が湯田中温泉に湯治に来る。
大正 11 年 (1922) 6.10	屋代～須坂間開業
大正 12 年 (1923) 3.26	須坂～信州中野間開業
7 月	河東鉄道が湯田中遊園地を整備 (昭和 16 年まで運営)
大正 12 年 (1923) 11.25	長野電気鉄道 (株) 設立。神津藤平社長。資本金 200 万円
大正 14 年 (1925) 7.12	信州中野間～木島間営業運転開始。 (屋代～木島間全線開業)
大正 15 年 (1926) 1.29	屋代～木島間電化
6.28	須坂～権堂間開業 ※すでに合併が計画されており新社名は「長野鐵道」であった (文書館史資料『列車時刻表』)
7.1	『長野電車名勝案内』 『長鉄沿線 北信の仙境山田温泉案内』 『信州第一の仙境 野沢温泉名勝案内』 発行 (いずれも長野鐵道が発行したもの)
8.10	『中野名勝案内』 発行 (長野鐵道が発行したもの)
9.30	河東鉄道が長野電気鉄道を合併。 長野電鉄株式会社誕生。
昭和 2 年 (1927) 4.28	平穩線 信州中野～湯田中間営業運転開始
8.2	長野電鉄直営上林ホテルの開業
昭和 3 年 (1928) 6.24	権堂～長野間営業運転開始

長野鐵道が存在した期間

主要参考文献

- 長野電鐵株式会社 創立 30 年
長野電鐵株式会社 長野電鐵 80 年のあゆみ
長野電鐵 60 年のあゆみ
長野電鐵 40 年のあゆみ
長野鉄道株式会社発行 長野電車名勝案内
長鉄沿線 北信の仙境山田温泉案内
長鉄沿線 中野名勝案内
信濃毎日新聞社 信州の鉄道物語（下）
信州観光パノラマ絵図: 鳥瞰図でたどる大正 - 昭和初期の鉄道・山岳・温泉
須坂市詩編さん室 須坂市誌 歴史編Ⅲ （第 5 巻）
須坂市教育委員会 須坂の製糸業
長野県立歴史館 展示図録
北陸新幹線 長野・金沢間開業記念 春季企画展
山と海の回廊をゆく-信越と北陸をつなぐ道
高崎市 新編高崎市史 通史 4
佐久市 小林政 佐久の先人たち⑧ ふるさとを想い、志賀高原と命名した実業家 神津藤平
週刊長野 足もと歴史散歩 185 神津藤平～鉄路と観光に刻まれた功績～
国立国会図書館 日本全国諸会社役員録第 32 回
宮田道一 上田丸子電鉄 上・下
砂本文彦 近代日本の国際リゾート
加藤三明 神津家の人々（慶応義塾大学 第 95 回三田評論 2014 年 11 月号）
江ノ島電鉄HP 江ノ電博物館 <https://www.enoden.co.jp/train/museum/history/>
京浜急行電鉄HP 京急の歩み <http://www.keikyu.co.jp/information/history/chronology/04.html>
広島電鉄HP 広電の歴史 <http://www.hiroden.co.jp/company/outline/history03.html>
能勢電鉄HP 年譜 <http://noseden.hankyu.co.jp/company/chronicle01.html>
京王電鉄HP 50 年史 https://www.keio.co.jp/company/corporate/summary/history/history_02.html

※各鉄道会社の変遷は出版物である社史を参考にしたかったが、近隣で入手できなかったため、会社公式ホームページを参照した。なお、平成 30 年 9 月 16 日に最終確認を行った。



わたなべさんぞう
渡辺三三の撫順史研究

～植民地支配と歴史学～

岐阜県立関高等学校地域研究部

片桐昂大 梅田拓海 岡本優奈 辻 龍成 江崎晃定
土田真菜 神谷 樹 白田真之 西部寛太



目 次

はじめに ～研究の経緯～	1
渡辺の研究活動を追う ～命がけだった史跡踏査～	
< 渡満から満州事変までの動向 1923～1931 >	1
< 満州事変から敗戦までの動向 1931～1945 >	2
旧満州をめぐる渡辺の歴史観	
< 研究、教育、文化財保護への情熱 >	4
< 『撫順史話』にみる渡辺の歴史観 >	4
抗日パルチザンの後退と渡辺の東進	5
おわりに	5
資料・参考文献・謝辞	6

旧蔵資料の実測・撮影・分析については片桐・梅田・岡本・辻・江崎・土田・神谷が、近代史的背景に関する資料収集・分析・考察については白田・西部が、それぞれ担当して資料化・文章化した。本稿の編集は片桐が行った。



はじめに ～研究の経緯～

2017年12月から2018年にかけて、岐阜県立関高等学校地域研究部（以下、地研部と略）は、岐阜県出身の歴史家、渡辺三三（1890～1977）の旧蔵資料の調査を行った。

渡辺は、終戦まで撫順を中心に活動し、高句麗や女真の研究に功績を遺した人物である。昨年、孫にあたる渡辺充氏が、自宅に保管されていた資料の一部を、岐阜県博物館（以下、県博と略）に寄託した。かねてから県博と連携していた地研部は、渡辺家と協議を重ねながら資料の研究を行うことに決定した。研究計画は以下の通りである。

- ① 旧蔵資料は関高校が一時的に預かり、地研部員が調査を行う。
- ② 旧蔵資料の保管・活用に関しては、県博・関高校・渡辺家の三者で話し合う。
- ③ 研究成果を積極的に発表する。同時に、県博で企画展を開催する。

まず①に関しては、地研部員が渡辺家を訪問し、写真や書籍を一時預かることにした。次に②に関しては、資料の重要性を考慮し、専門研究者が常駐する九州大学総合研究博物館への寄贈を決定した。さらに中国・韓国の研究機関に、データを送ることを協議している。③に関しては、2018年度日本考古学協会総会高校生ポスターセッションや、2018年度全国高等学校歴史学フォーラム（九州国立博物館）での発表を行った。

また、普及活動の一環として、県博（2018年9月11日～10月21日）、岐阜県図書館（2018年11月13日～25日）で、それぞれ企画展を計画した。県博では9月29日に、公開講座（地研部の発表、寺内威太郎明治大学教授の講演）も行う予定である。図書館には、渡辺が踏査に使用した陸軍参謀本部作成地図の複製が保管されているので、同時に展示する予定である。

私たちの研究は、遺物実測や写真・文献の精査から始まった。学会での発表内容も貴重な資料の再評価や保全・活用が中心であった。しかし、次第に研究を深める中で、渡辺が活動した時代的背景にまで踏み込んで研究を行うようになった。当初は文化財の調査や保全をテーマに活動していたが、おのずと近代史の研究に軸足を移していたのである。今回の研究では、渡辺の業績を振り返りつつ、植民地支配と歴史学の関わりについて、特に渡辺の歴史観やその歴史的背景について考察を行う。

渡辺の研究活動を追う ～命がけの史跡踏査～

<渡満から満州事変までの動向 1923～1931>

1890（明治23）年、岐阜県安八郡輪之内町に生まれた渡辺は、岐阜師範学校（岐阜大学教育学部の前身）を卒業し、県内各地の小学校で教鞭をとった。1923（大正11）年、33歳になった渡辺は、旧満州に渡り、撫順の永安小学校、東七条小学校で教壇に立つ。

なにゆえ旧満州に日本人学校が存在したのかといえば、話は1905（明治38）年のポーツマス講和条約締結にまでさかのぼる。この条約で日本は、関東州の租借権、東清鉄道（長春～旅順）の経営権をロシアより譲渡された。これにより鉄道付属地の撫順は炭鉱の街として栄え、結果、多くの日本人が移住した。初等教育の拡充は、日本人居留民の激増に伴って必要とされたのであり、各地に建設された小学校の教員不足を補うため、内地の教員が募集・動員に応じ渡満した。渡辺もこうした教員のひとりであった。

渡辺の研究活動は満州事変（1931.9）以後、活発化する。事変以前、果たして渡辺がどの程度の研究をおこなっていたのか判然としないが、今回、その当時の活動を物語る資料が発見された（資料1－考古遺物）。

ラベルを付した遺物がそれであり、その一部からは採集日や採集場所を知ることができる。石包丁（「望海窩（塙）」「昭4 11 28」）、環状石斧（「望海窩（塙）」「昭4 11 28」）、磨製石斧（「昭5 11 9」）、磨製石斧（「4 12」）の計4点に、それぞれカッコ内に付した文字が読み取れる。ラベルにも登場する望海塙は、戦前から日本人によく知られていた遺跡で、日本の直轄領だった関東州金州区に所在する（文献18・22・23）。

渡辺が渡満した1923（大正11）年当時、旧満州の治安は決してよいとは言えない状態にあった。前年、日本はシベリア出兵を断念して撤退、これに伴い、パルチザン（補注）に参加していた朝鮮人活動家はソ連側によって武装解除された。結果、独立を望む活動家の中には、旧満州の延吉・磐石を中心に、共産主義青年組織を結成する者もいた（文献16）。

当初、渡辺の活動範囲は、勤務地の撫順及び満鉄沿線の比較的治安のよい地域に限られていたようだ。石器に付されたラベルは、当時の渡辺の活動範囲を物語る。

すでにこの時期、渡辺の活動は、現地の治安当局や撫順炭鉱の保護下に置かれるようになった。1929（昭和4）年、撫順郊外の明代遼東辺牆踏査の際には、「匪賊」の害を用心するため、警護付きの活動を行ったことが記録されている。「排日の旺盛な当時」「単独調査は危険」であったため、「郊外探査の際はいつも警官及撫順炭坑労務関係」で「用心棒」を用立てしてもらったというのである（文献4）。

渡辺の情熱を疑うものではないが、史跡の保全・活用と研究の遂行という目的を達成するため、渡辺自身も当局に積極的に接近した可能性は否定できない。

補注：パルチザンとは、占領軍等に抵抗した非正規兵士を指す。ゲリラとほぼ同義語。
＜満州事変から敗戦までの動向 1931～1945＞

1931（昭和6）年9月、日本軍による軍事行動によって始まった満州事変により、日本軍の勢力は一気に旧満州全土におよんだ。結果、1932（昭和7）年、満州国が建国されることになり、渡辺の研究者としての活動範囲も広がることとなった。

1933（昭和8）年5月5日、撫順郊外の高爾山遠足中に古代の土塁を発見、これが北関山城の発見につながった（資料6 - 地図2）。文献精査と現地踏査を経て、渡辺はこの山城を、史書や碑文にあらわれる高句麗の「新城」に比定した。335年、撫順の玄菟郡治（永安公園土城）を征服した高句麗は、渾河対岸北方の山塊に山城を築き「新城」と命名した（『三国史記』高句麗本紀故国原王5年）。踏査成果は早くも同年に論文発表されている（文献1）。この論文の抜刷は渡辺家に保管されていた。

1935（昭和10）年11月、満州国皇帝溥儀の招きによって、かつて家庭教師だった英国人レジナルド・ジョンストンが訪満。外交官であり東洋学者であったジョンストンは、清朝初期の史跡探訪を希望、満州国当局は現地の事情に通じた渡辺に案内役を依頼する。当時、渡辺氏は奉天の敷島小学校の教員。国賓の案内人としては異例かもしれないが、すでにこの時期の渡辺は、現地における第一人者であったということであろう。

ジョンストンは11月8・9日、清朝初期の史跡を見学。しかし、治安には不安があったようで、兵士に警護されたトラック1台が先駆してバスを警護している。渡辺はこの小旅行を「興京二夜」という一文にまとめ、雑誌『満蒙』2月号（文献3）に寄稿した。『満蒙』には、渡辺・ジョンストン・程明超の3人の記念写真が掲載されている（写真資料2）。この写真の実物は渡辺家に保管されていた。許可を得てアルバムから剥がすと、裏面に、ジョンストンと渡辺のサインが残されていた（写真資料1）。

1938（昭和 13）年 長年に渡る撫順史研究の成果を『撫順史話』（文献 4）にまとめ上梓した。さらに渡辺はこの年、黒竜江省の綏化小学校校長から満州国国立撫順図書館長に就任する。一教師から、満州国の文教政策の一角を担う重職に転身したのである。

この時期、前年に始まった日中戦争の影響で、旧満州の日本軍とパルチザンの抗争も激しくなり、軍の出動範囲も拡大した。図書館長就任と戦火の拡大により、軍に守られた渡辺のフィールドは、念願の撫順東方の山岳地帯へと広がることとなった。

1939（昭和 14）年 1936（昭和 11）年、永安公園内誉丘から漢代遺物が出土（千秋萬歳銘瓦等）し、この地が漢代土城であり、史書にいう玄菟郡治（第三次）と推測されるにいたる（資料 6 - 地図 2）。のちに渡辺は斎藤武一とともに、この土城や北関山城出土の瓦に就いての論考をまとめ報告している（文献 6）。このほか、渡辺家には銅鏃 4 点（資料 1 - 考古遺物）が保管されていた。銅鏃の形態や文献 4・6 から、誉丘出土遺物と判断できる。

渡辺家にはこの年に撮影された蘇子河畔での写真が保管されていた（写真資料 3）。裏面に、1939（昭和 14）年 10 月 15 日の日付がある。前列中央が渡辺。その左に撫順新報社長の窪田利平。当局によりパルチザン掃討が進められていたとはいえ、踏査には警護が必要だった。当局の全面支援を受けた研究体制であったことを象徴する写真である。

1940（昭和 15）年 9 月 撫順東方の鉄背山城踏査の記念写真（写真資料 4）。鉄背山城は、ヌルハチが興京防衛のために築かせた要塞であった（文献 12）。右から 3 人目が清朝史の権威、和田清東京帝国大学教授。1940（昭和 15）年 9 月 25 日の日付がある。

1940（昭和 15）年 10 月 2 日～15 日 渡辺は池内宏や三上次男とともに北関山城の発掘調査に参加（文献 15）。高句麗山城に関する初の発掘調査であり、戦後、中国側による再調査も行われている。渡辺家にはこの時の写真が保管されていた（写真資料 5）。裏面に 1940（昭和 15）年 10 月 15 日の日付が残る（発掘修了日）。前列中央が池内宏。後列中央に渡辺。後方に、戦後の東北考古学を主導した李文信の姿も見える。

1941（昭和 16）年 裏面に 8 月 10 日の日付がある。床の間を背にリュックを携えた姿で撮影（写真資料 6）。「古城子踏査」との記載があるが、ここにいう古城子とは、桓仁の地名を指すと考えられる。陸軍参謀本部の十万分の一地図（懐仁）にある「古城子」の地名を手がかりに、8 月 10～20 日にかけて、踏査を行ったと推測される（資料 7 - 地図 3）。

1940 年、渡辺は永陵南郊で漢代土城を発見した。永陵をはじめ訪れたのが 1935 年であるから、フィールドが確実に拡大していった経緯がうかがわれる。パルチザンの勢力は後退しつつあったが、桓仁の治安は楽観視できるものではなく、相当の決意で臨んだのではないか。この写真のみ絹目高級紙が使われている。もちろん想像の域を出ないが、「不測の事態」を考えて「遺影」として撮影されたのかもしれない、と我々は考えた。

この年の 12 月、日本は日中戦争の打開策を見いだせないまま太平洋戦争に突入した。

1944（昭和 19）年 敗色濃厚になった 1944 年も、渡辺は精力的に研究を続けていた。北関山城二次調査（5 月 19～27 日）、陳相屯塔山の高句麗山城踏査（5 月 28 日）、桓仁方面の遺跡踏査（6 月 1～5 日、資料 5 - 地図 1）と、矢継ぎ早に調査が行われている（文献 14・15）。

敗戦と帰国 1945（昭和 20）年 8 月の敗戦にともない、渡辺もそれまでの地位を失った。

1947（昭和 20）年に帰国し、故郷の安八郡輪之内町の生家に帰った。戦後は旧満州の歴史研究からは離れ、輪之内町の町史編纂事業等に携わった。1977（昭和 52）年死去。

旧満州をめぐる渡辺の歴史観

本章では、渡辺の著作をもとに、渡辺自身の歴史観に関し考察を加える。

<研究、教育、文化財保護への情熱>

渡辺は、史跡保存の現状に対する不満や憤りを憚ることなく露わにしている。『撫順史話』では、北関山城において現地の農民が遺構の一部を耕作で破壊している現状を嘆いているし、「興京二夜」(『満蒙』1936.2 掲載)では、永陵の荒廃ぶりに憤り、「恐れ多き通り越して、是が多年あこがれてゐた永陵であったかと疑って見たくなつた、と共に満州国当事者は一体何処に何を標準に王道楽土を建設しようといふのかと質問したくなつた」と、かなり踏み込んだ批判を行なっている(文献3・4)。

満州国建国の大義のひとつが、満州族の民族自決に求められるならば、皇帝溥儀の遠祖を祀った永陵は、聖地としての威厳を保つべく整備されるべきと主張したかったのかもしれない。歴史や史跡に深い想いを寄せる渡辺の姿勢には偽りはなからう。

そのことは、戦後も郷土輪之内の郷土史研究に尽力したことからも裏打ちされる。生徒を連れての高爾山遠足、撫順中学の教師・生徒の北関山城調査参加等、実地で学ぶ歴史教育にも熱心だったようである。

渡辺は、一教師として郷土史研究に情熱を捧げ、手堅い成果を発表して中央に認められ、国賓ジョンストンの案内役を務めるまでにいたつた。さらに国立図書館長となり、帝大研究者の先導者となつた渡辺は、まさに「東満州の史跡案内人」と呼ぶにふさわしい。

<『撫順史話』にみる渡辺の歴史観>

渡辺の研究成果は『撫順史話』にまとめられている(文献4)。章立ては、「先史」「漢代・玄菟郡」「高句麗山城」「千三百年前の我国防と新城」「撫順塔」「辺牆」「撫順城」「撫順馬市」「ヌルハチ」「サルフの戦い」「奉天会戦」「永安橋」「撫順炭坑」の順となっている。読み進めると全体を貫くテーマがはっきりと見えてくる。

それは、固有満州民族(高句麗・渤海・女真等)と周辺民族(漢・蒙古等)の興亡史を、地政学的観点から描き出すものであり、時流に乗ったいわゆる満鮮史観であつた(文献21)。すなわち、その時々覇権国家が満州を支配することこそが、満鮮史の本質であり、日清・日露に勝利した日本帝国が、満州族の溥儀を国家元首に据える満州国を支援することは、歴史的にみて、理にかなつた行為とする歴史観である。

以下、満鮮史観にのつとつた歴史解釈の具体的事例を二例挙げておく。

「千三百年前の我国防」と新城 渡辺は、高句麗新城を隋唐帝国の侵攻に対する我が国の「国防の最前線」だと主張する。確かに、他国の領土と言えども、高句麗が抜かれれば倭国も危機に瀕する。しかしこれには、渡辺の別の意図があつたのではないかと考える。一つに、満州国建国の意義である。満州国をかつての高句麗と重ね合わせ、蒋介石政権やソ連邦を牽制することが可能と言いたいのであろう。

女真の興起と近代日本軍 明の抑圧をはねのけて拡大する女真の活躍ぶりは、日露戦争時にロシア軍を南満州から駆逐した日本軍の行動と重ね合わせるかのように描かれている。渡辺は自己の想念世界の中で、中原勢力と争つた高句麗や、明を破つて中国を支配した清と、日清・日露を通して満州経営に乗り出した日本を重ねているのである。

抗日パルチザンの後退と渡辺の東進

渡辺が関心を抱いた撫順東方の地は、「匪賊」の跋扈する地として知られていた。反体制

勢力である「匪賊」の中には、群盗や武装農民、民族派組織等、様々な集団が含まれるが、日本当局を最も悩ませたのは、中国共産党指導下の抗日パルチザンであった（文献 11・16・19・20）。

撫順周辺で活動したパルチザンの指導者に、楊靖宇（1905-1940）がいる。

1929年、中国共産党より旧満州に派遣され、1932年5月には、東北人民革命軍第一独立師の師団長兼政治委員、34年末には南満洲遊撃区を管轄する第一軍軍長に就任。配下には朝鮮人兵士が多く、桓仁や興京で激しい戦闘を繰り広げた。撫順東方の史跡調査をめざす渡辺を悩ませた「共匪」とは、楊靖宇配下の人民革命軍兵士たちだった。

1936年3月、東北人民革命軍は、傘下の組織を拡大して東北抗日連軍と改称し、さらに攻勢を強めた。これに手を焼いた日本軍は、山間地の集落を閉じさせて平地の集団部落に強制移住させた。山間地の村々がパルチザンの拠点となることを恐れて焼き払ったのである。日本軍は航空機を動員した掃討作戦を繰り広げ、集団部落制度をさらに徹底した。

掃討作戦は功を奏し、パルチザンは追い詰められ、楊靖宇も1940年2月に射殺された。解剖された胃の中には、木の皮や草の根しかなかったという。生き延びたパルチザンはソ連領に逃れ、1941年1月までに抗日連軍の組織的活動は終了した。

撫順から永陵、興京、桓仁へ。当然のことではあるが、渡辺がフィールドを東方へと拡大した時期は、抗日連軍の勢力後退・崩壊期とおおむね重なる。

おわりに

渡辺の調査は常に危険と隣り合わせであり、軍警に守られてようやく成り立つものだった。命がけの学問的情熱には頭が下がるが、「匪賊」と呼ばれたパルチザンも、祖国の独立回復のために一身を投げ打った人々である。そうした歴史を学ぶ中で、厳しい環境下に置かれた当時の人々の労苦を知った。近代史に関しては、まだまだ勉強不足の私たちであるが、考古学・前近代史を学ぶと同時に、近代史にも真摯に向き合っていこうと思う。

渡辺三三旧蔵資料は、歴史探究の楽しさを私たちに教えてくれた。それと同時に、戦争や植民地統治と学問の関わりを、受けとめ考える機会も与えてくれた。研究を続ける最中、私たちは仲間うちで、いつしか、渡辺三三のことを「三三さん」と親しみを込めて呼ぶようになった。帝大研究者やジョンストンがそうであったように、私たちも「三三さん」にいざなわれて、旧満州の歴史に親しんだ。その意味ではまさに東アジア史の案内人である。

今年は日中平和友好条約締結四十周年記念の年でもある。つたない研究ではあるが、中国や韓国の関係機関にデータを送り、埋もれていた貴重な資料を東アジア各国で共有したいと思う。

最後に、この研究を行うに当たって、貴重な機会を与えていただいた渡辺充氏、活動の場と数々の助言をくださった岐阜県博物館、研究発表に協力していただいた日本考古学協会及び九州国立博物館、資料受け入れを快諾してくださった九州大学総合研究博物館の皆様に、心より感謝を申し上げたい。

【資料 1 - 考古遺物】

石器類の一部に、1929（昭和 4）年・1930（昭和 5）年に、望海窩（望海塙）で採集されたことが記されている。望海塙遺跡は、日本でも戦前から知られていた遺跡であり、戦後、中国も調査を行っている。基本的には紀元前 2 千年紀後半の双砵子 3 期文化の遺跡である。いずれも典型的な遼東系磨製石器であり、弥生時代の大陸系磨製石器の祖型にあたるものである。

渡辺が、望海塙遺跡もしくは同じ遼東地域の新石器時代遺跡で採集したものと考えられる。渡辺の関心はおもに漢代以降であり、新石器については熱心に探究した形跡はない。満州国建国以前の段階においては、比較的治安のよい満鉄付属地内の遺跡の踏査等をおこなっていたものとみられる。

銅鏃 4 点は、漢代青銅製の三翼鏃と考えられる。渡辺の著作に、撫順の漢代土城で「漢代銅鏃」を発掘したとの報告がある。誉丘（永安公園）の出土品と考えられる。

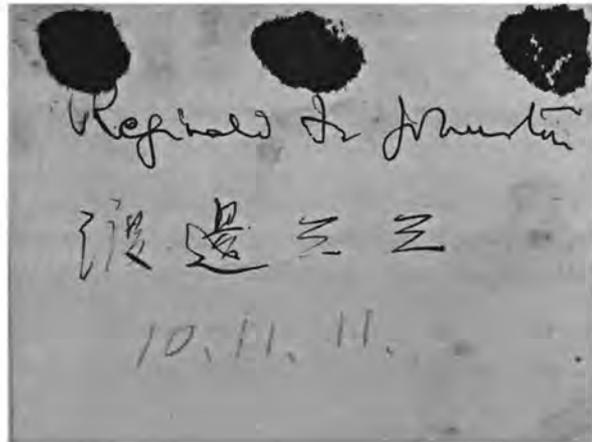
	器種	形状	時代	長×幅×厚（mm）	重量	ラベル表記・採集場所
1	石包丁	破片	新石器時代	70×(48)×7	34.4	
2	石包丁	破片 石戈の再利用か	新石器時代	(87)×49×11	68.1	望海塙 昭和 4 年 11 月 28 日
3	環状石斧	破片	新石器時代	100×43×13.5	76.2	望海塙 昭和 4 年 11 月 28 日
4	磨製石斧	完形品	新石器時代	63×36×15	64.6	石斧 昭和 5 年 11 月 9 日
5	磨製石斧	完形品	新石器時代	125×66×26	420.2	
6	磨製石斧	破片 蛤刃	新石器時代	(88)×63×30	357.3	
7	磨製石斧	破片 蛤刃	新石器時代	(76)×49×66	421.1	
8	磨製石斧	完形品	新石器時代	88×63×30	218.3	
9	磨製石斧	完形品	新石器時代	107×68×27	345.4	昭和 4 年 12 月
10	銅鏃	三翼	漢代	19×9.1×6	2.5	撫順誉丘出土
11	銅鏃	三翼 鉄製茎	漢代	28×10×8	5.9	同上
12	銅鏃	三翼 鉄製茎	漢代	23.8×8.5×7	2.7	同上
13	銅鏃	三翼 鉄製茎	漢代	18.5×9×7.1	3.6	同上

カッコ内は現長



銅鏃（写真左上）と石器類

【資料 2 - 写真図版 1】

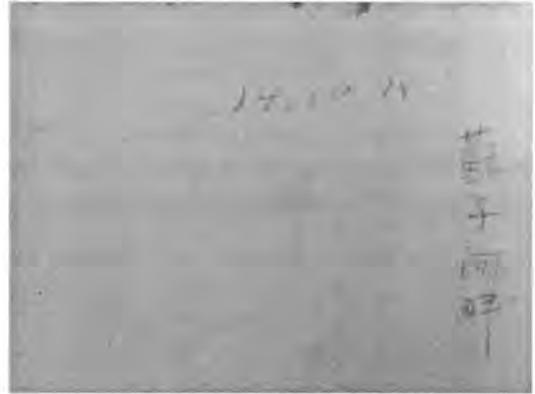


写真資料 1 左から渡辺、ジョンストン、程明超。裏面に 1935（昭和 10）年 11 月 11 日の日付と、ジョンストン、渡辺の署名あり。雑誌『満蒙』（左下写真）に同一写真が掲載されている（右下写真）。

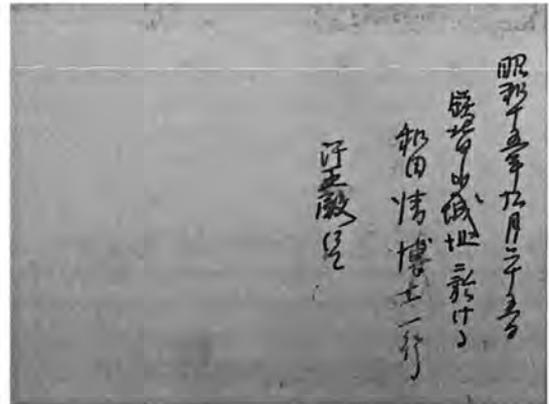


写真資料 2 雑誌『満蒙』（1922～1943）は社団法人満州文化協会発刊の雑誌。満鉄の協力の下、満鉄調査部の研究成果を毎号掲載したほか、文学や歴史学に関わる文化記事も多い。渡辺は「興京二夜」と題した一文を 1936 年 2 月号に寄稿。1935 年、かつて、愛新覺羅溥儀の家庭教師を務めたレジナルド・ジョンストンが、皇帝となった溥儀の招きで来満した際、清朝初期の史跡を案内した渡辺が紀行文として一文をまとめたものである。

【資料3 - 写真図版2】

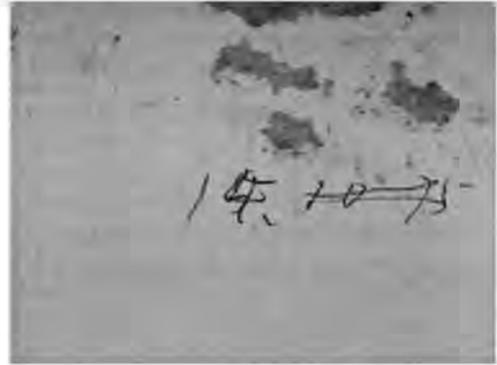


写真資料3 蘇子河畔での記念写真。軍人もしくは警察官を伴った踏査。1939（昭和14）年10月15日の日付あり。前列中央が渡辺。その左に撫順新報社長の窪田利平の姿も見える。蘇子河流域には清朝勃興期の史跡が多く、渡辺の主要なフィールドであった。日本軍の攻勢によりパルチザンは劣勢に追い込まれていたが、踏査には警護が必要だった。撫順新報社・軍警が同行していることから、当局が全面支援した踏査であったことがわかる。

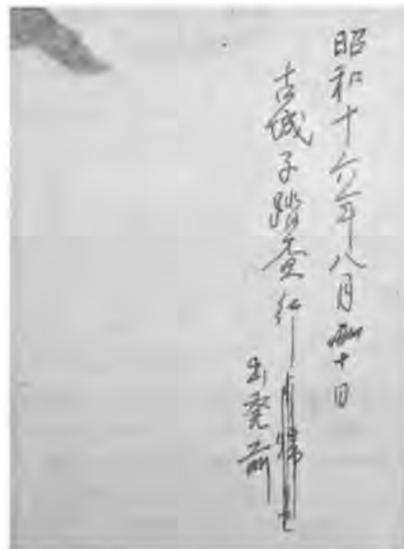


写真資料4 撫順東方の鉄背山城踏査の記念写真。右から3人目が和田清東京帝国大学教授。採集した遺物も写っている。後列左に渡辺、前列左に窪田利平。1940（昭和15）年9月25日の日付あり。鉄背山城は、1619年、ヌルハチが明の大軍を破ったサルフ（薩爾滸）の戦いの舞台のひとつ。興京を守る拠点としてヌルハチにより築城された。サルフ山とは蘇子河を隔てて対峙する。

【資料4－写真図版3】

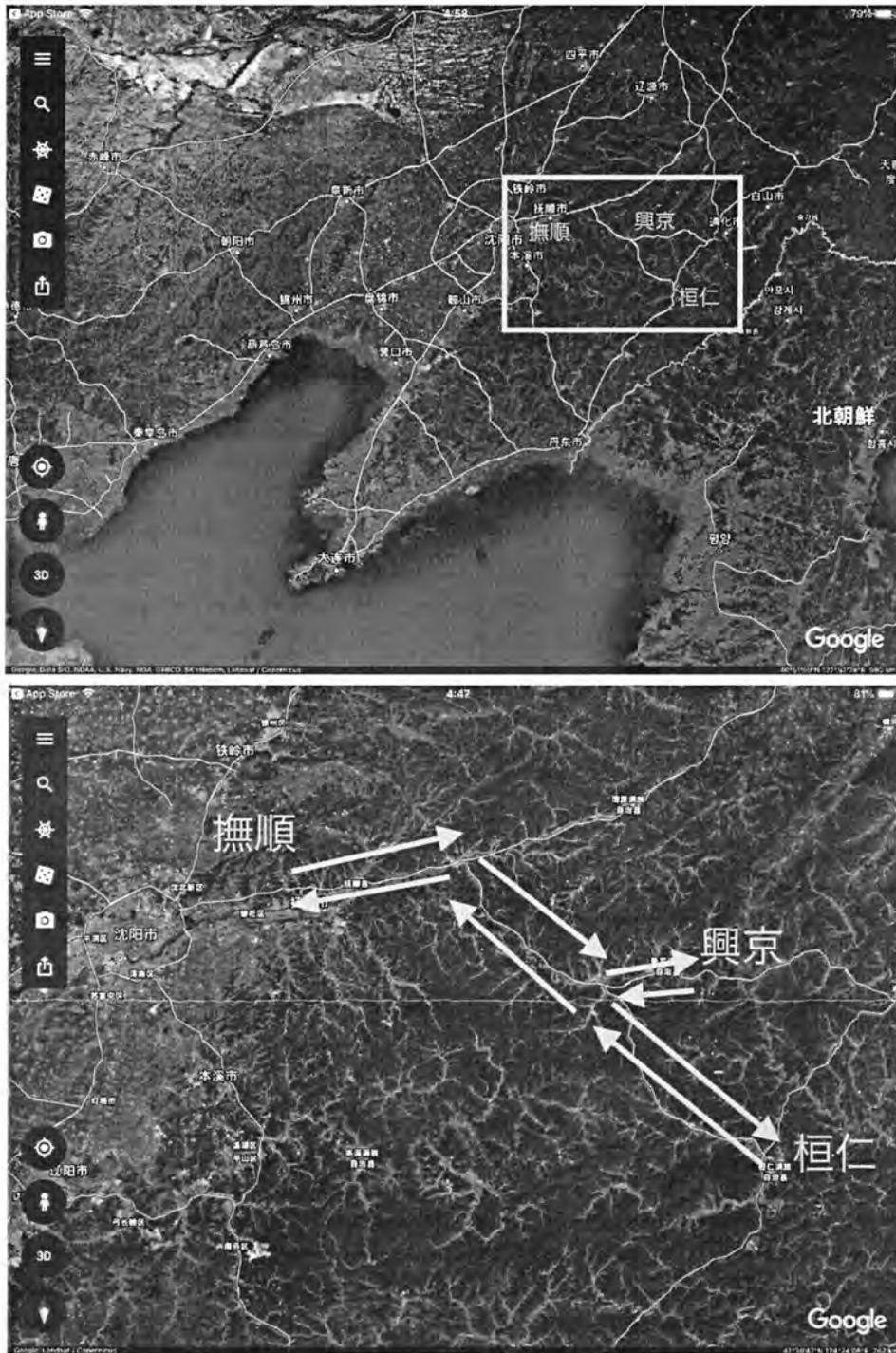


写真資料5 撫順の北関山城発掘時の記念写真。前列中央が池内宏。後列中央に渡辺。後方に小さく李文信の姿も写る。1940（昭和15）年10月15日の日付あり。北関山城報告書（『北関山城』1993）によれば、この日は発掘終了（埋め戻し）の日と記録されている。調査メンバーの顔に安堵感があらわれているようも思える。メンバーの中心人物、三上次男の姿が見えないが、撮影者であるためかも知れない。撫順の玄菟郡治を制圧した高句麗は、北方の山塊に「新城」を築いた（335）。渡辺が発見した山城は高句麗新城の遺跡であり地名から北関山城と命名された。戦後の中国では高爾山山城と通称されている。



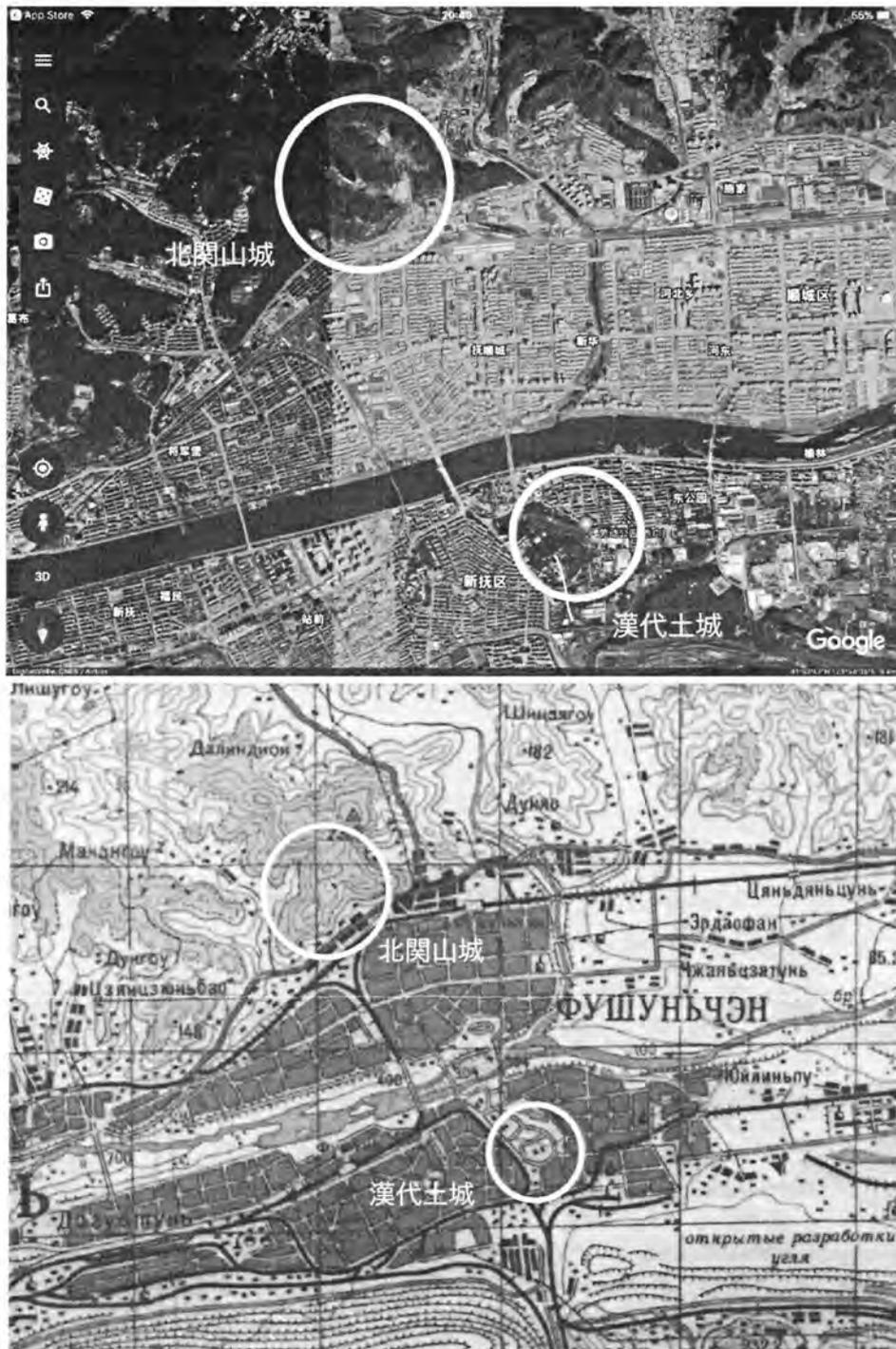
写真資料6 1941（昭和16）年8月10日の日付あり。床の間を前にリュックを携えた姿で撮影。「古城子踏査行 出発前」との記載あり。ここにいう古城子とは、桓仁方面の地名を指すと考えられる。1940年、渡辺は高橋匡四郎とともに、蘇子河畔で漢代土城を発見している。この年も引き続き、漢代土城の調査を行うため、さらに奥地の桓仁の地を訪れたものとみられる（8月10～20日）。治安の悪い地域であったため、相当の決意で臨んだのではないか。この写真のみ、印画紙に絹目の高級紙がつかわれている。こうした渡辺の経験は、のちの三上次男の踏査（1944）に活かされることになる。

【資料5－地図1】



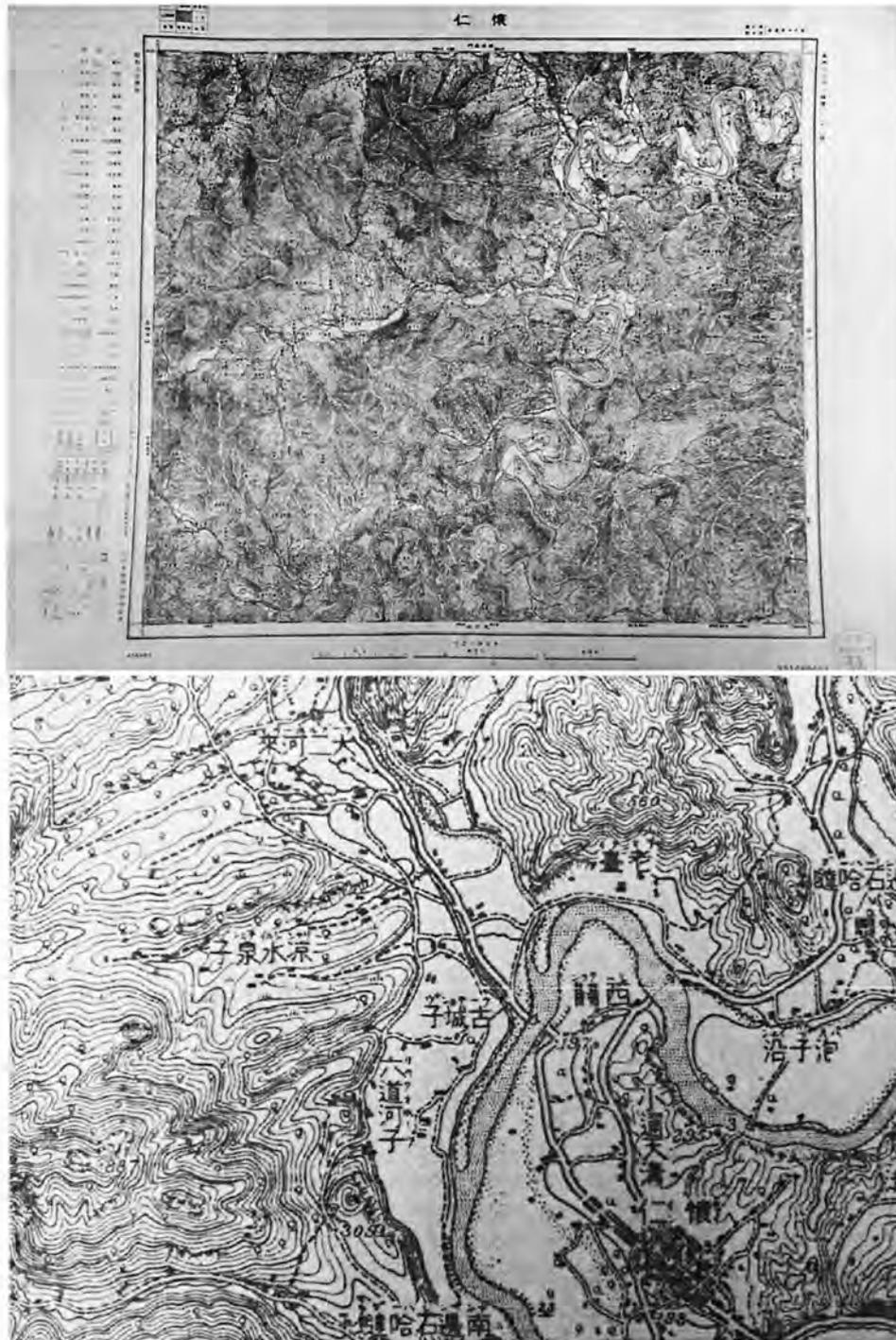
撫順東方の関連地図 撫順は遼東平原と東部山岳地帯の境に位置する。初期清朝の拠点・興京（フェアラ）、高句麗発祥の地・桓仁（卒本）は、撫順の東方、東部山岳地帯に所在する。渡辺は興京、そして桓仁方面をめざし踏査を進めた。写真資料にある通り、ジョンストン、和田清、三上次男らは、渡辺の案内でこのルート上を踏査した。下段の地図は、1944（昭和19）年5月1日から5日にかけて行われた三上次男の踏査ルートである。

【資料6－地図2】



撫順市内地図 上段は現在の撫順市内空撮写真。下段はほぼ同一地点をあらわした旧ソ連製地図（岐阜県図書館所蔵）。空撮写真と地図には、北関山城（高句麗新城）と永安公園土城（第三玄菟郡治）の位置を示した。下段地図は、戦後すぐに旧ソ連が作図したもので、渡辺の活動した時期の撫順市街地の様子を知るうえで貴重である。

【資料7-地図3】



満州十万分の一地図「懷仁（桓仁）図福」 日本陸軍参謀本部陸地測量部作製地図（岐阜県図書館所蔵）。1932（昭和7）年。三上次男「東満風土雑記 高句麗の遺跡をたずねて」（文献14）によれば、この地図に見える古城子の地名（下段写真中央）をたよりに、下古城子土城を踏査している。渡辺の写真（1941.8.10撮影、写真資料6）裏面にある古城子の地名も、この地図の記された古城子をさすものとみられる。

【参考・引用文献一覧】

< 渡辺三三蔵書（抜刷を含む） >

- (1) 渡辺三三『高句麗の新城』奉天図書館叢刊第10冊（1933）
- (2) 『満州読本』財団法人東亜経済調査局（1934）
- (3) 『満蒙』2月号（1936）
- (4) 渡辺三三『撫順史話』撫順新報社（1938）
- (5) 和田清「清の太祖と李成梁との関係」『稲葉博士還暦記念満鮮史論叢』（1938）
- (6) 渡辺三三・斎藤武一「満州国撫順の古瓦に就て」『考古学雑誌』29—11（1939）
- (7) 和田清「清祖発祥の地域について」『池内博士還暦記念東洋史論叢』（1940）
- (8) 『満鮮地理歴史研究報告 第十六』東京帝国大学文学部（1941）
- (9) 園田一亀『明代建州女直史研究（続編）』（1953）
- (10) 「満文老档訳注」『史学雑誌』第61編第8号（1953）

< 歴史学・考古学全般 >

- (11) 澤地久枝『もうひとつの満州』文藝春秋社（1982）
- (12) 岡田英弘「サルフの戦い」『戦』社会思想社（1984）
- (13) 神田信夫・三上次男『東北アジアの民族と歴史（民族の世界史）』山川出版社（1989）
- (14) 三上次男『高句麗と渤海』吉川弘文館（1990）
- (15) 三上次男・田村晃一『北関山城 高爾山山城：高句麗「新城」の調査』中央公論美術出版（1993）
- (16) 姜在彦『満州の朝鮮人パルチザン 1930年代の東満・南満を中心として』青木書店（1993）
- (17) 松浦茂『清の太祖ヌルハチ』白水社（1995）
- (18) 大貫静夫『東北アジアの考古学』同成社（1998）
- (19) 李進熙『高句麗・渤海を行く 新版』青丘文化社（2002）
- (20) 山室信一『キメラ 満州国の肖像 増補版』中公新書（2004）
- (21) 井上直樹『帝国日本と“満鮮史” 大陸政策と朝鮮・満州認識』塙書房（2013）
- (22) 宮本一夫ほか『遼東半島上馬石貝塚の研究』九州大学出版会、（2015）
- (23) 宮本一夫『東北アジアの初期農耕と弥生の起源』同成社（2017）

【謝辞】

本研究を行うにあたり、渡辺充氏をはじめとする皆様、関係機関の方々にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

渡辺 充 岐阜県博物館 日本考古学協会 九州国立博物館
九州大学総合研究博物館 岐阜県図書館 寺内威太郎
清水信行 中山清隆 宮本一夫 中村慎一 （順不同、敬称略）



《1918》 暴動・戦争・疫病

—100年前に大分でおきた3つの事件—

大分東明高等学校郷土史研究部

安野花菜（部長）・古矢夕輝（副部長）・亘鍋千晶・佐田昴駿



はじめに

大分市に桜ヶ丘聖地という墓地があります【写真1】。ここは大分からシベリアへ出兵して（1918年）戦死した、大分連隊の兵士たちの墓地（陸軍墓地）です。桜ヶ丘聖地について調べてみると、シベリア出兵は今からちょうど100年前に起きていた出来事だということに気づきました。そこで、100年前の1918年（大正7）に大分では他にどのようなことが起きていたのか、どんな時代だったのか、という疑問が出てきました。そこで、私たちは100年前の大分について、地方新聞を手がかりに調べてみることにしました。

1918年は、1914年（大正3）年にはじまった第一次世界大戦がようやく終わりを告げる年です。また1917年（大正6）には、ロシア革命も起きています。第一次世界大戦やロシア革命は、当時の世界全体に影響を与えました。そしてこの時代は、世界の歴史や社会が大きく転換する時代でした。

当時、大分県では『大分新聞』と『豊州新報』という地方紙がありました。部員で手分けして新聞を読み進めると、この年にはシベリア出兵のほか、米騒動やスペイン風邪の記事がたくさんありました。これらの事件は、大分だけでなく全国的に展開したものです。また、第一次世界大戦やロシア革命など歴史的な事件とも密接に関係していました。今回は新聞記事中心に、100年前の大分で起きた（1）米騒動、（2）シベリア出兵、（3）スペイン風邪の3つの事件を通して人々の生活状況や社会情勢についてみていきます。

なお、資料として添付した新聞記事は、『大分新聞』5月6日付ならば「大5/6」、『豊州新報』10月10日付ならば「豊10/10」と表記しています。

1 米騒動

（1）米騒動とは

米騒動は1918年（大正7）7月23日、富山県魚津町の漁村の主婦たちが米価高騰に苦しみ、米の移出反対を叫んで起こした「越中女一揆」に端を発したといわれています。米騒動は、福岡県大牟田市と周辺の三池炭鉱の騒動が終わった同年9月12日までの約50日間にわたる、米価の引き下げを求める大衆運動（騒動）でした。米騒動は1道3府37県38市153町178村（369カ所）にわたり、参加人数は100万人（公式発表では70万人）にのぼる日本史上最大規模の民衆運動でした。政府は、軍隊を出動させこれを鎮圧しましたが、時の寺内正毅内閣は総辞職に追い込まれました。寺内内閣のあとは、原敬内閣が成立しましたが、これはわが国ではじめての本格的な政党内閣でした。米騒動が、政党内閣を成立させたと言っても過言ではありません。

当時は今と違い、肉などの動物性食品の摂取が少なかったため、日本人の食生活は穀物類が主体でした。特に、肉体労働者は激務のため1日に1升（10合）もの米を消費したと言われ、米価の高騰は家計を圧迫し、人々の生活を困窮させました。

（2）新聞からみた日常生活と米

『大分新聞』1918年（大正7）3月5日に「期米又復大爆発」という見出しで米価が上がっているという記事があります。そして、米価の値上がりの記事は8月まで毎月掲載され、日を追うごとに表現が厳しくなっています。国産米は高いので、政府は米価を安くしようと外米（外国産の米）を多く輸入し、廉売（通常より安い値段で販売）しています。8月1

日には、国産米は町村役場で管理するように農商務省が指示しています。

3月8日には富山、新潟での米の買い占めの記事が掲載されています。3月の時点で北越地方の米価は東京より高いと書かれています。他にも、外米を不当に高く販売していたという商店の記事もあります。8月10日には「富山の女一揆」の記事が掲載されています。富山で米騒動が起こったのは7月23日ですから、大分の新聞に載ったのは発生して18日も後だったことがわかります【資料1】。8月13日には京都の暴動の記事が載っています。京都では八百人の群衆が「米屋を殺せ」と口々に叫んでいるという内容もあり、米騒動がかなり過激だったことがわかります【資料2】。

一方でシベリア出兵と米騒動が関連した記事も掲載されています。7月18日にはその年の米作は非常に不良とあり、出兵説が伝えられたことによって各地の期米(先物取引の米)、正米(現在流通している米)の物価が上がったと書いています【資料3】。7月21日にも正米自体の際限のない高騰に加えて、シベリア出兵という特殊な出来事が加味され、米価が高騰していきます。シベリア出兵が、米価の上昇に拍車をかけました。

(3) 米騒動と大分

新聞を見ていくと大分でも米価が高騰しているという記事が3月から出てきます【資料4】。5月31日には、大分市内にいよいよ外米が届いたという記事が掲載されています。8月11日には「百年に百倍した米価 生活難の渦巻きが大分懸下にも襲うて来た」という記事から、米価の高騰が人々の生活を非常に苦しめていたことがよくわかります【資料5】。

大分での米騒動は、8月13日夜から14日未明にかけて発生した別府町(現別府市)の騒動が唯一と言われています。当時の新聞では暴動にまでは発展しなかったものの、臼杵町(現臼杵市)や中津町(現中津市)の不穏な状況も伝えています。臼杵町については7月25日「白米が一升につき一錢方の値上げ」「特等米三十五錢、一等三十四錢五厘、二等三十四錢」で、大分県下で最高価格だという記事が出ています【資料6】。8月21日には「漸く喰い止めた臼杵の米騒動」という記事があります。その内容は、群衆が米穀商を襲撃しようとして氣勢を示していたのを警官に阻止されたというもので、臼杵町でも町民の不満が米騒動になる一歩手前までできていたことがわかります。その後、臼杵の町議会で善後策を協議し、外米を1升18錢で安く売り、精米所では日本米を1升25錢で販売したことが書かれています。さらに、元臼杵藩主の稲葉氏が2500円を寄付したとあります。8月14日の記事には中津町で一部の富裕層が300円を出し、購買券を生活に追われる家々に配布することを企てたとあり、臼杵町と中津町では富裕層による救済で収束に向かったようです【資料7、8】。裏を返せば、富裕層が自分の家が襲われないように現金を出したとも見て取れます。8月31日の記事には大分県内で唯一米騒動が起きたといわれる別府町でも生活困窮者に対し、購買券を配布することを別府町議会で決定したと載っています【資料9】。

このように見ていくと、大分県下では特に8月中旬ごろに米価が最も高くなり、8月下旬には価格が落ち着いてきたことがわかります。意外にも別府町の記事が少ないのですが、これは米騒動に関する報道が規制されたからだと推測されます。騒動にまで発展しなかった臼杵町や中津町の記事の方が多くありますが、特に中津町の様子が新聞には多く掲載されていたことは新たな発見でした。

2 シベリア出兵（シベリア戦争）

（1）シベリア出兵（シベリア戦争）とは

第一次世界大戦中の1917年（大正6）にはロシア革命が起き、世界で初めて社会主義政権（のちのソビエト政府）が生まれました。この政権は1918年（大正7）、ドイツ・オーストリアと単独講和を結び、第一次世界大戦から離脱しました。一方、社会主義国の成立を恐れたイギリス、フランスなどの連合国は、内戦下のロシアへの干渉戦争を企てて、日本にも共同出兵を要請しました。寺内内閣はアメリカが、シベリアで孤立しているチェコスロヴァキア軍の救援を名目とする共同出兵を提唱してきたのを受けて、同年8月にシベリアに日本軍を派兵しました【地図1】。

シベリアに派兵された日本軍は、各地で革命軍パルチザン（民兵組織）と戦いました。そして、撤退するまでに3500人を超える戦病死者をだしました。そこで近年は、「シベリア出兵」ではなく「シベリア戦争」とよぶこともあります。

（2）新聞から見たシベリア出兵

6月20日にはアメリカ、イギリス、フランスの列国が日本に出兵を強く希望しているという記事が載っています【資料10】。7月14日には日本が7月12日の閣議で出兵を決定したという記事があり、20日には日米出兵宣言をアメリカへ正式回答したとあります【資料11】。出兵に対して、国内で様々な議論をしている記事が非常に多かったことから、あまり歓迎される出兵ではなかったのだろうと読み取れます。また、当時の世界における日本の立場を考えると列国の出兵要請に反対できなかったと推測されます。

特に注目したのは、出兵記事掲載禁止に対する記事です。7月18日に「報道の自由を有せざるを遺憾とす」とあり、報道制限に対して当時の新聞社が、報道の自由を重要視していたことがわかります【資料12】。陸軍省からシベリア出兵に関する報道を厳しく制限するよう命令が出たことに対し、8月11日の「軍記事絶封禁止」という記事で、本意ではないが従わなければならないという内容を大分新聞社と中津新聞社が合同で出しています【資料13】。新聞社として、読者に何が起きているのかを伝えたいという心が伝わってきます。

（3）ユフタの悲劇

大分第72連隊に動員令が下ったのは、1918年（大正7年）8月2日です。大分連隊は8月27日大勢の大分市民が見守る中、歓声に包まれながら送り出されました。そして、9月1日にウラジオストクに到着し、ウラジオストク及び周辺の守備を命じられます。

極寒のシベリアで大分連隊第3大隊の田中勝輔支隊は、革命軍パルチザンの集結の知らせを受けて出動します。田中支隊（約300人）はユフタ村付近（アムール川流域、シベリア鉄道沿線）で、待ち伏せしていた敵の主力（約2000人）と遭遇、激戦の末ほぼ全滅しました（「ユフタの悲劇」）。

新聞でも第72連隊に関連した記事が多く出てきます。7月20日には、シベリアへ救護班として赤十字大分支部から看護人が2名派遣することを決定したという記事があります【資料14】。8月27日の記事では、第72連隊の出兵に対して、市民が歓喜して送り出している様子がうかがえます【資料15】。この頃の記事では、日付やどこの連隊かが特定でき

ないように「○日の大分市は」「○○連隊出兵」と、詳細な情報を伏せて表現しているものもあります。8月31日には、大分新聞社の松山通男記者を従軍記者として派遣するという記事があります。地方の新聞社の記者が、シベリアの戦地へ行っていたことは驚きです。9月4日には、第72連隊が無事にウラジオストク港への上陸が終わったという『豊州新報』の号外がだされています。9月21日には『豊州新報』の号外、22日には『大分新聞』で第72連隊の最初の負傷者について伝えています【資料16】。その後、1919年（大正8）3月2日には、田中支隊がユフタ付近でパルチザンと戦い全滅したという、衝撃的な記事が掲載されています【資料17】。出兵から半年後、「田中支隊全滅」の記事を目にして、この出兵に意味があったのかという疑問と世界と大分とのつながりを感じました。

3 スペイン風邪

（1）スペイン風邪とは

スペイン風邪は、人類が初めて遭遇した「新型インフルエンザ」です。1918年（大正7）から翌年にかけて世界的に大流行し、世界史上「最も多くの人、最も短時間で死に至った記録的な事件」と言われています。当時の世界人口は約12億人、その半数の約6億人が感染し、死者は5000万人～6000万人と言われています。なお、感染源はアメリカと言われ、第一次世界大戦でアメリカ兵がヨーロッパに投入され、ヨーロッパで爆発的に流行しました。戦争が世界中に感染を広める役割を果たしていました。「スペイン風邪」という呼称は、スペイン王室の人々が感染し死亡する様子が、センセーショナルに報道されたことから付けられたといわれています。

日本では、1918年6月頃に流行が始まり9月頃から大流行しました。日本では2000万人以上が感染し、約38万人が死亡しました（内務省の報告）。当時の日本の人口は約5700万人ですから3人に1人が感染した計算になります。近年は、死者数は約48万人だったという説もあります。このような世界的な大事件だったにもかかわらず、私たちが使っている日本史の教科書（山川出版社）は、全く触れていません。

（2）新聞から見たスペイン風邪と大分

大分県では、当時の人口90万人のうち約30万人がスペイン風邪に感染し、7000人以上が死亡しています【表1】。10月から大流行し11月にピークを迎えています。『大分新聞』9月3日には、天災地変の後（この年、大分は水害にも見舞われている）には必ず伝染病が流行すると予想している記事があります。その後、スペイン風邪が大流行したため記事の予想は当たったようです。『大分新聞』10月30日には大分県警察部から、11月2日には大分県知事から、感冒予防など注意喚起の記事が出ています。城井村（現中津市）では、役場から「注意事項」を書いたピラが住民に配布されています【写真2】。7日には、大分新聞の社員が次々と流行性感冒に罹患したため、不本意ながら夕刊も引き続き休止するという社告が掲載されています。スペイン風邪の流行で新聞も一時休刊となり、大分と別府を結ぶ電車も運休するなど、社会生活に大きな影響を与えていたことがわかります。12日には「物凄い事になった 火葬場が混む」という見出しの記事が載っています【資料18】。感冒の広がり、死亡者が多く火葬場が混むというのは驚きです。特に学校でのスペイン風邪流行の記事が、11月に多く見られます。7日にはついに大分市内における全ての学校

が休校したという記事があります【資料 19】。15 日には大分市の小学校で授業が開始するという記事あり、学校での流行が下火になってきたようです【資料 20】。19 日の「懸下感冒患者 四萬餘」という見出しの記事を読んでもみると、最盛期の 3 分の 1 に減少したと書いています【資料 21】。どれほど多くの方がスペイン風邪に罹ったかがよくわかります。スペイン風邪の流行は 3 度あり、1919 年（大正 8 年）1 月 28 日の感冒の記事から、再度の流行がわかります【表 2】。

（3）スペイン風邪とシベリア出兵

大分でも猛威を振るったスペイン風邪は、シベリア出兵にも関わってきます。6 月 25 日には、「大分にも流行性感冒の襲来の模様、第 72 連隊の兵士は外出を禁止して警戒している」という記事が載っています。9 月 17 日には、シベリア出兵において、「戦闘による死傷者より恐るべきは出兵將卒（兵士たち）の衛生状態だ」と書いている記事があり、「悪性の感冒等」という言葉が出てきます【資料 22】。『豊州新報』の号外で「病兵別府に来る」という見出しの記事があります。9 月 22 日に 6 名、3 日後の 25 日に 26 名の病兵が別府の病院に来ると書いています。陸軍傷病兵療養地としての別府の姿が読み取れます【資料 23】。10 月 8 日には大分連隊での最初の戦病者の記事が掲載されています【資料 24】。

特に注目したのは、11 月 20 日の記事です【資料 25】。この記事は、シベリアへ出兵した兵士の死亡者数のうち、スペイン風邪での病死者数が戦死者数よりも多いというものです。シベリアでのスペイン風邪が、日本軍にとって脅威であったことがわかります。『大分新聞』11 月 21 日には、大分補充隊（大分に待機している留守部隊）が、感冒襲来を免れたと書かれています。外出禁止、マスク、うがいなど現代と変わらない対策をとっていたのは驚きです。留守部隊が、スペイン風邪で全滅しては、留守部隊の意味がないので、徹底的に対策をしたのだと推測できます。

おわりに

1918 年（大正 7 年）3 月から 1919 年（大正 8）3 月までの 1 年間を大分の地方新聞を通して見てきました。今回の作業を通じて、気付いたことがいくつかあります。

第 1 に、米騒動とシベリア出兵、スペイン風邪とシベリア出兵のように、それぞれの事件が互いに影響し合っていることが読み取れました。第 2 に、3 つの事件とも、世界的な出来事と密接につながっていました。第一次世界大戦がスペイン風邪を拡大させ、ロシア革命がシベリア出兵を兵引き起こしました。米騒動にはロシア革命が影響しているといわれ、わが国が外米を買いあさったことで、周辺諸国でも米価が高騰し騒ぎがおきました。世界と大分は、つながっていました。第 3 に、記事には想像していたよりも政府批判が、多く載せられていたことに驚きました。「軍記事絶封禁止」の記事を目にしたとき、第二次世界大戦中の言論統制へと続く片鱗を感じましたが、まだこの時代は政府批判が可能でした。

今回の調査を通して感じたのは、地方新聞という限定した視点から歴史を見ていくことも、新たな郷土料の発見になるということです。そして大分という地域も、世界の歴史の一部だったことを強く感じる事ができました。取り上げた 3 つの事件の他にも、大分が世界と繋がっていた史実が眠っているかもしれません。これからも引き続き、大分の歴史に目を向け調査していこうと思います。

【資料 13】軍事記事絶対禁止「大 8 / 11」

軍事記事絶対禁止

出兵動員其の他陸海軍事に關する記事は從來本紙に於て國軍の行動若くは機密を害せざる程度に於て讀者諸君に報道致居候處這回陸軍省より凡て軍事に關する記事は婉曲巧妙に記載せるものも雖も軍事専門家が情況を推測するに足るべきものは一切記載を禁止する旨命令あり聊か苛察の嫌なきに非ざるも國軍の機密を害すことせば忍で是に服するの外なき依りて諸般の動靜は今後其の筋の發表を待つて報道すべく右茲に聲明致候

大分新聞社
中津新聞社

【資料 14】西伯利へ救護班
「大 7 / 20」

西伯利へ救護班

赤十字大分支部看護人派遣

日本赤十字社が今回の出兵に關し西伯利亞に救護班派遣に決したるは昨夕刊所報の如くなるが、大分支部にも本社命あり、救護班より看護人(男)二名を選拔し本社に派遣することとなり既に人選を終り今明日中に出発することに決定したり

【資料 15】嗚呼、光榮の連隊旗「大 8 / 27」

嗚呼光榮の聯隊旗!!

我が郷土第七十二聯隊は

文に武に意氣に十二師團管下の隨一
洵に九州男兒の精神豊園健兒の代表
之長たる田所大佐は剛毅謹嚴の人格者

榮ある記念の日よ八月二十七日

田所大佐は陸軍大學出身で剛毅謹

五月八日宮中に於て軍旗を拜授し

て始めて三個大隊の正式聯隊となつて

演習成績



【資料 16】七十二連隊最初の負傷者
「豊 9 / 21」

豊州新報第一號外

七十二聯隊最初の負傷者

宮崎歩兵一等卒

出征歩兵第七十二聯隊第五中隊一等卒宮崎喜三郎は本月七日午後七時頃守備隊長熊野佛堂中尉の指揮に依りラバトクエより南方約一里半にある橋梁警戒のため上等兵以下四名にて斥候に出て歸還の途中怪しき人影を認めたるより近づき確からんこしたるに先方は直ちに射撃をなし我亦之に應じ敵は直に逃走森林中に逃込委を隠し宮崎氏は負傷したり廿一日野戰歩兵第七十二聯隊より大分補充隊へ公報ありたるが敢は判然せざるも過激派の者なるべし

因に宮崎一等卒は大野郡小富士村大字片ヶ瀬千八百五番地の生れにて父は宮崎鶴吾と呼び今回の召集に應じ出征したるものなり



【写真1】桜ヶ丘聖地（大分市）、主にシベリア出兵の犠牲者を祀った陸軍墓地。中には、シベリア出兵で犠牲になった軍馬の墓も7基ある。



【写真2】城井村（現中津市）で住民に配布されたスペイン風邪予防のピラ。同村の医師中根時雄が保存していた。中根は、治療に忙殺されたという。

一、流行病を根絶せざるは注意し常に呼吸器を用ふる事
 二、多数人の集會を避くる事
 三、感冒、咳嗽、頭痛等あるものは速に醫師の診察を受くる事
 四、患者は呼吸器に隔離の上静養せしむること
 五、患者の唾液、食物、排泄物は消毒の必要なるを以て其処理に一般の預防に就ては醫師に協議の上實行すること
 六、患者は患者に近づく可く接近せざること
 七、病室は窓を日光の直射によりよく滅殺せざるを以て居室に常に清潔を保ち空氣を良く日光の射入を圖ること
 八、靴、衣服は毎日日光に晒すこと
 九、今回流行の感冒は普通の感冒と異なり其た急性なるを以て治癒法に甘んずれば往々餘命を併發し死因となす者亦尠からず故に必ず醫察を怠らざること

注意事項

大正七年十一月 城井村役場

【表1】第一回流行都道府県別死亡者数

0	都道府県	流行の初期	総人口	患者	死者	患者/人口%	順位	死者/人口%	順位	死者/患者%	順位
1	北海道	10月下旬	2,088,455	491,179	8,507	23.5	39	0.41	30	1.73	9
2	青森	10月1日	796,760	378,030	4,588	47.4	13	0.58	11	1.21	22
3	岩手	10月10日	877,263	342,790	3,878	39.1	25	0.44	25	1.13	28
4	宮城	10月上旬	906,799	394,347	3,239	43.5	17	0.36	40	0.82	41
5	秋田	10月中旬	976,036	247,997	3,885	25.4	37	0.40	32	1.57	13
6	山形	10月上旬	936,482	457,905	3,519	48.9	11	0.38	37	0.77	42
7	福島	8月	1,269,508	509,339	5,196	40.1	22	0.41	29	1.02	35
8	茨城	8月下旬	1,325,868	499,922	5,910	37.7	29	0.45	24	1.18	24
9	栃木	10月上旬	1,103,950	334,253	4,326	30.3	34	0.39	33	1.29	19
10	群馬	不詳	1,036,934	349,021	5,132	33.7	32	0.49	17	1.47	16
11	埼玉	9月7日	1,394,582	799,925	10,065	57.4	1	0.72	2	1.26	20
12	千葉	10月	1,465,654	308,609	3,588	21.1	43	0.24	46	1.16	26
13	東京	10月中旬	3,639,663	1,421,980	13,574	39.1	26	0.37	38	0.95	37
14	神奈川	10月上旬	1,324,609	289,058	5,131	21.8	42	0.39	34	1.78	7
15	新潟	10月中旬	1,934,823	424,511	6,617	21.9	41	0.34	42	1.56	14
16	富山	9月上旬	815,838	378,167	3,926	46.4	15	0.48	18	1.04	34
17	石川	10月下旬	822,041	143,396	3,935	17.4	46	0.48	21	2.74	1
18	福井	9月下旬	616,652	237,510	4,077	38.5	27	0.66	5	1.72	10
19	山梨	8月上旬	607,945	248,613	2,814	40.9	21	0.46	22	1.13	27
20	長野	10月上旬	1,539,338	633,715	6,649	41.2	19	0.43	26	1.05	33
21	岐阜	10月上旬	1,127,938	425,351	6,998	37.7	28	0.62	8	1.65	11
22	静岡	9月中旬	1,496,161	750,192	5,438	50.1	9	0.36	39	0.72	45
23	愛知	10月16日	2,120,477	1,029,530	6,983	48.6	12	0.33	43	0.68	46
24	三重	10月上旬	1,119,713	306,996	6,475	27.4	35	0.58	10	2.11	3
25	滋賀	10月上旬	717,217	181,909	3,243	25.4	38	0.45	23	1.78	6
26	京都	10月中旬	1,367,306	372,685	6,814	27.3	36	0.50	16	1.83	5
27	大阪	10月上旬	2,754,090	473,131	11,280	17.2	47	0.41	28	2.38	2
28	兵庫	10月上旬	2,299,727	833,669	14,730	36.3	30	0.64	6	1.77	8
29	奈良	8月	580,841	271,968	3,219	46.8	14	0.55	13	1.18	23
30	和歌山	10月中旬	737,793	332,626	3,539	45.1	16	0.48	19	1.06	30
31	鳥取	10月上旬	476,903	199,527	3,257	41.8	18	0.68	4	1.63	12
32	島根	9月下旬	760,668	417,383	5,199	54.9	4	0.68	3	1.25	21
33	岡山	10月5日	1,287,200	529,327	4,916	41.1	20	0.38	35	0.93	38
34	広島	10月中旬	1,583,614	634,053	9,043	40.0	23	0.57	12	1.43	17
35	山口	10月8日	1,102,771	432,303	4,542	39.2	24	0.41	27	1.05	32
36	徳島	10月	747,009	409,543	4,465	54.8	5	0.60	9	1.09	29
37	香川	10月上旬	754,260	400,340	6,028	53.1	7	0.80	1	1.51	15
38	愛媛	10月中旬	1,126,546	590,881	5,643	52.5	8	0.50	15	0.96	36
39	高知	10月上旬	703,899	147,253	924	20.9	44	0.13	47	0.63	47
40	福岡	10月19日	2,093,427	683,226	7,262	32.6	33	0.35	41	1.06	31
41	佐賀	10月上旬	705,608	404,237	3,697	57.3	2	0.52	14	0.91	39
42	長崎	10月上旬	1,210,785	282,629	3,289	23.3	40	0.27	44	1.16	25
43	熊本	9月中旬	1,264,188	674,019	5,131	53.3	6	0.41	31	0.76	43
44	大分	9月20日	893,145	302,068	5,629	33.8	31	0.63	7	1.86	4
45	宮崎	10月中旬	642,439	357,387	3,076	55.6	3	0.48	20	0.86	40
46	鹿児島	10月中旬	1,470,221	731,466	5,554	49.8	10	0.38	36	0.76	44
47	沖縄	11月中旬	557,162	104,432	1,436	18.7	45	0.26	45	1.38	18
	合計		57,180,308	21,168,398	256,366	37.0		0.45		1.21	

*内務省衛生局編『流行性感冒』より作成

*総人口は、大正6(1917)年末現在

*死者合計は、訂正した。

【表2】流行期間の患者・死亡者数

流行	期間	患者数	死亡者数	死亡率
第一回	大正7年8月～8年7月	21, 168, 398	257, 363	1. 22
第二回	大正8年10月～9年7月	2, 412, 097	127, 666	5. 29
第三回	大正9年8月～10年7月	224, 178	3, 698	1. 65
計		23, 804, 673	388, 727	1. 63

* 『流行性感冒』104ページより引用。死亡率は死者／患者（％）

【参考文献】

麻田雅文『シベリア出兵』（中公新書、2016年）

内務省衛生局編『流行性感冒』（平凡社、2008年）

柴田秀吉『シベリア出兵「ユフタの墓」』（2005年）

大分放送大分歴史事典刊行本部編『大分歴史事典』（大分放送、1990年）

成田龍一『大正デモクラシー』（岩波新書、2007年）

○『大分新聞』デジタルデータ（大分県立図書館）

○『報酬新報』デジタルデータ（大分市立図書館）

第12回全国高校生歴史フォーラム 研究タイトル一覧

(レポート受付順に掲載)

研究タイトル	高等学校名
河口湖天上山に伝わる『カチカチ山伝説』の真相と天上山の現在 ～カチカチ山伝説の発祥地は本当に天上山なのか～	山梨県立吉田高等学校
宗春公と共にあった多宝塔 一名古屋御下屋敷の考察—	岐阜県立加納高等学校
野田宇太郎の歴史	福岡県立朝倉高等学校
青年の日本に対する思い	//
魚河岸の歴史 ～日本橋、築地、そして豊洲へ～	中央学院大学中央高等学校
姫路・加西に居(お)った捕虜 ～祖国(くに)を離れて～	兵庫県立姫路東高等学校
軍都相模原と鉄道 軍都計画は周辺鉄道に何をもたらしたか	武相高等学校
《1918》暴動・戦争・疫病 —100年前に大分でおきた3つの事件—	大分東明高等学校
徳川慶喜「京都御旅館」の考察	京都府立鴨沂高等学校
長野電鉄絵地図における幻の社名から探る小林一三・神津藤平の先見的鉄道経営構想	長野県須坂高等学校
城跡を観光資源にして地域の活性化を目指す ～千葉県の城跡 特に東金城に焦点を当てて～	市原中央高等学校
未来の話をしよう ～日中の歴史と向き合う～	大阪府立生野高等学校
大和川付け替え	//
祭りから見る地域の特色 布団太鼓の分布と地域性	//
2025年大阪万博が残す遺産 1970年大阪万博がもたらした遺産から	//
大阪に世界遺産を 百舌鳥・古市古墳群から見る世界遺産	//
大阪で発生した地震と南海トラフ地震 過去の地震と未来の地震	//
日本が難民をより多く受け入れるにはどうすればよいか	//
雇用形態 ～日本の抱える問題を解決するためには～	//
稲毛三郎重成の居館と居城 ～伝承と史料から考える～	専修大学附属高等学校
十河信二の功績に学ぶ 一夢の新幹線開通に向けて—	愛媛県立西条高等学校
伊勢国豊田城の研究	三重県立四日市高等学校
与謝郡与謝野町加悦谷の歴史社会 一石造物の基数と銘文に着目して—	京都府立宮津高等学校
遠江国の国府の在処を探る 一坂上田村麻呂上陸の地から、歴史的・科学的に検証する—	静岡県立磐田西高等学校
福岡市高宮地域の考察 一自然・歴史に対応する地名—	福岡大学附属大濠高等学校
安楽平城と荒平くずれ中牟田氏について学ぶ	//
形式と戒名から探る地域信仰の形態 一安中市 自性寺の墓石を中心に—	群馬県立桐生高等学校
長崎県壱岐市大久保遺跡の研究 ～縄文時代晩期貝殻粉混和土器に関する一考察～	長崎県立壱岐高等学校
特攻隊の意義と評価	静岡県立韮山高等学校
城下町としての船場の構造	大阪明星学園明星高等学校
古代ローマ帝国における「酒」と社会	宮城県仙台二華高等学校
太宰治 一死を読み解く—	大分県立臼杵高等学校
『地誌編輯材料取調書』で発見した新井村の小さな新田開発	栃木県立学悠館高等学校
実慶の研究 ～仏像と納入物について～	埼玉県立伊奈学園総合高等学校
西村捨三と大阪港 ～西村捨三小伝をもとに～	近江高等学校
近代から未来への顔の変化は？ ～カコからイマへ イマからミライへ～	安田女子高等学校
防災武将伊達政宗と瑞巖寺	宮城県仙台西高等学校
国府が府中に置かれた理由 ～武蔵の歴史と国府の候補地～	海城高等学校
「取手宿」を中心とした利根川流域の発展 ～利根川支流：小貝川流域を中心に 本多作左衛門との関わり～	江戸川学園取手高等学校
水戸の御殿って何？	常磐大学高等学校
明治維新と水戸の関わり	//
鉄道の歴史 ～今と昔とこれからと～	桜丘高等学校
中国と日本の首都について	甲陽学院高等学校
深大寺地域の発展と観光地としての現在	早稲田実業学校高等部
南朝忠臣史観の正統性の検証 ～南朝解釈の変遷を参考にして～	麻布高等学校

研究タイトル	高等学校名
渡辺三三の撫順史研究 ～植民地支配と歴史学～	岐阜県立関高等学校
戊辰戦争時の仙台藩 ～奥羽越列藩同盟までの道のり～	宮城県小牛田農林高等学校
早稲田大学100周年記念事業 「新キャンパス」誘致に関する一考察	早稲田大学高等学院
千葉県我孫子市・柏市における将門伝説の誕生に関する考察 ―社会的動乱期における千葉氏・相馬氏の存亡をかけた計略―	〃
草山貞胤の生涯と交流 ―農産物共進会・報徳思想との関わり―	神奈川県立秦野曾屋高等学校
奥津家文書から見る御旗奉行の役割	〃
岩手の古墳について	岩手県立釜石高等学校
五百羅漢と天明の大飢饉	〃
それぞれの南部ばやしの特色	〃
釜石市の漁業・鉄鋼・ラグビーの歴史について	〃
山田祭り	〃
南部藩の虎舞の起源を探る ～虎舞はどこで生まれ、どのように広まっていったのか～	〃
和宮の発見されなかった左手について	雲雀丘学園高等学校
門司港から見る北九州港の歴史	〃
明石海峡大橋の歴史	〃
西国街道を訪ねて	〃
伊丹の清酒の歴史	〃
猪名川流域の古墳と政治権力	〃
遠州の内陸水運の衰退は東海道線の開通が原因か？ ―内陸水運の要衝である掛塚湊と福田湊の歴史分析を通して―	静岡県立磐田南高等学校
祇園祭は何故神社ごとに異なってきたのか？ ―遠州地域を例として―	〃
磐田市の転び切支丹の記録から、明治6年の禁教令廃止にいたる地域の切支丹史を検証する	〃
遠江国国府の三度の移転から今、何を、学ぶべきか	〃
なぜ物語は変えられ二つになったのか ～磐田市のしっぺい物語から～	〃
「開かれた歴史学」の可能性を探る―一路としての「南部三閉伊一揆」研究 ～高校生が問う現代の歴史学の在り方～	岩手県立岩泉高等学校
「忠魂碑」への“眼差し”～過去・現在・未来～ 埼玉県岩槻区「忠魂碑」群の史資料の“可能性”―保存と課題―	開智高等学校（中高一貫部）
草加松原団地と現代地域資料保存の研究 「高校生草の根アーカイブズ」としての取り組みと課題	〃
座談会から甦る地域教育と近代 「埼玉県大宮市教育史座談会」のオーラル・ヒストリー	〃
尊氏と福岡 ―九州との繋がりを知ろう―	福岡県公立古賀成成高等学校

※個人情報に配慮して、研究タイトルと高等学校名のみを記載しています。

〈 審 査 委 員 〉

清水 哲郎 (審査委員長・奈良大学 学長)	土平 博 (実行委員長・奈良大学 文学部地理学科 教授)
池田 安隆 (奈良大学 文学部地理学科 教授)	石川 一 (奈良大学 文学部国文学科 教授)
小林 青樹 (奈良大学 文学部文化財学科 教授)	新宮 一成 (奈良大学 社会学部 心理学科 教授)
外岡慎一郎 (奈良大学 文学部史学科 教授)	原口志津子 (奈良大学 文学部文化財学科 教授)
元根 俊孝 (奈良大学 文学部国文学科 教授)	吉田 光次 (奈良大学 社会学部 総合社会学科 教授)
横山 香 (奈良大学 文学部史学科 准教授)	笹岡 勇也 (奈良県教育委員会 指導主事)

第12回 (2018年) 全国高校生歴史フォーラム 発 表 集

編集・発行 第12回全国高校生歴史フォーラム実行委員会
〒631-8502 奈良市山陵町1500 奈良大学 広報室内
TEL 0742-41-9588
印 刷 共同精版印刷株式会社
〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6

奈良で学ぶ贅沢



主催

奈良大学・奈良県